329
262

帝國圖書館藏
329-242

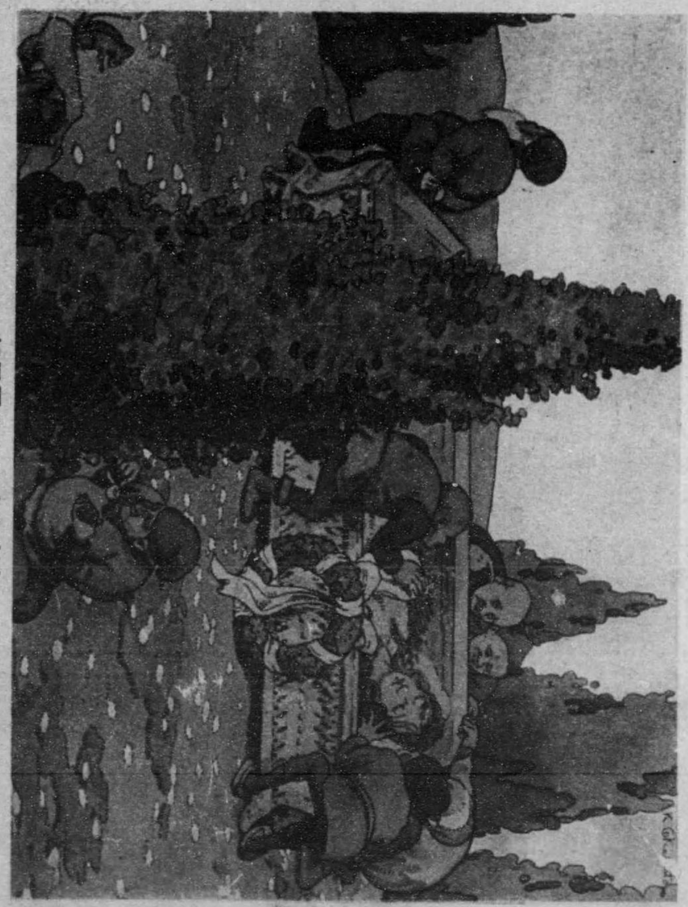
嘶伽御ムリグ

全

中島孤島譯

東京 冨山房發行 神田

大正
5. 5 12
內交



第一節本圖 —— 雪の中の梅の蕾

BUCHSCHMUCK
von
KIICHI OKAMOTO.

グリム兄弟*のこと〔解説に代ふ〕

——ヘルマン・グリム**が「追懐記」より——

一

ヤコブ、キルヘルムの二兄弟は殆ど同庚（おないどし）といつてもいい、年兒（としご）に生まれた兄弟ではあるが、さすがにヤコブの方が年上らしく、また健康も、病身な私の父のキルヘルムは、伯父のヤコブに及ばなかつた。伯父は生涯娶らず、私の父と、兄弟一家に同棲して仲むつまじく共同の勞作をつゞけた末、二人ともベルリンの馬太寺の墓地に並んで葬られた。二人は共に南プロイセンの小都會ハナウの町（マイン河の流域、フランクフルト市の近く）で、兄は一七八五年一月四日に、弟は一七八六年二月二十四日に生まれた。伯父と父と、二人の誕生日は、その時分、それぞれ私達の子供心に何よりも樂しい祝ひ日であつた。

*グリム兄弟——兄ヤコブ・ルウドヰヒ・カルル・グリム（Jacob Ludwig Karl Grimm 1785—1863）弟ヰルヘルム・カルル・グリム（Wilhelm Karl Grimm 1786—1859）共に有

Wilhelm Grimm
1786—1859

名なるドイツの言語學者、本書御伽噺の集成者なり。別に少弟ルウドヰヒ・グリム（Ludwig Grimm）畫家として知らる。

**ヘルマン・グリム——（Hermann Grimm 1828—1901）ヰルヘルム・グリムの子、美術史家として知らる。本文「追懐記」の筆者。以下文中「父」と呼ぶはヰルヘルム・グリム、「伯父」とあるは、ヤコブ・グリムのことと知るべし。

Jakob Grimm
1785—1863

二人は青年時代を共にカッセルの學校に過した。マルブルクの學校に遷つても二人は一所であつた。後、聘せられて共にカッセルの國立圖書館員となり、數年間その大きな書庫を自由にしてゐた。かくて一八二九年以後、ゲッチンゲンに在ること七年、最後の十年をベルリンに送つた。ベルリンに於いて、最初まづヰルヘルム、一八五九年十二月十六日、七十三歳を以て世を逝つた。思ひ出すとつひ目の前のことのやうに

思はれるが、冬の寒い日であつた、伯父はかぼそい手に堅い土くれを掴むでは父の墓穴に手向けてゐた。越えて三年、一八六三年九月二十日には、伯父も七十七歳を以て愛弟の跡を追つた。二人は最後までも元氣よく研究に耽つてゐた。それでも父はどうかすると時々倦怠の樣子を見せたが、伯父は死際まで將來の計畫を樹ててゐた。

ドイツ人と名のるほどのものにグリム兄弟の名を知らないものはない。ドイツの子供は生まれると間もなく父母の次にはこの兄弟の名を懷しみつゝ生長するのである。「あなたがグリム兄弟の親類といふのはほんたうか」と、私はこれまで何度人に聞かれたか知れなかつた。私が兄弟の實子であり甥であるといふことがその人達に親類のやうな親しみをおぼえさせるのである。私にとつてこれほど嬉しい名譽はなかつた。誰一人兄弟の名を愛敬しないものはない。この愛敬の情はこの後も幾代か長く繼承せられるであらう。兄弟のために記念の銅像が建てられると聞いたとき、凡てのドイツ人は競つてその費用を寄附した、遠い異域に在るものまでが喜捨をした。子供と貧民は一錢二錢の金を集めて持つて來た。

兄弟は早く父親を失つて、學業は大抵自修であつた。母親と弟妹に對する扶養の義

務は早くから二人の肩上に荷はせられてゐた。一八〇六年ナポレオンのために祖國のうけた屈辱は、既に祖國の名譽のため、劍を執つて立たうとしたほどに兄弟を憤激させた。同時に然し彼等は、將來ドイツ帝國の必らず回復せらるべきを信じ、自分達は寧ろ學問の研究に依つて國民としての獨立を維持せんとする希望を固めた。

伯父と父についての私の記憶はゲッチンゲン時代から始まるのであるが、其頃私達子供等が父と「アパパ」——私達は伯父のことをさう呼んでゐた、出入の人達もやはりその名で呼んでゐた——の書齋に入る時はそつと邪魔をしないやうに心を配つてゐた。しんとした書齋の中にはペンの軋る音ばかりが高かつた、時々伯父が小聲に囁く聲がした。伯父は顏を紙の上に近く當てゝ短いペンで性急に書いた。父は長い鷲ペンの尖にインクをひたして考へ考へ筆を執つた。二人の顏の表情はたえず動いた。眉を上げたりひそめたり、時にはぼんやり空を見つめたりした。書架から本を探し出してしきりと頁をくる時もあつた。何人もこの神聖な靜寂を破るものがあらうとは思はれなかつた。

ゲッチンゲンでの兄弟の仕事室は廣い庭園の中に在つて、一本の菩提樹と垣根で外

を限られてゐた。その書齋の窓には二人の好きな草花がいつも飾られてゐた。伯父はアラセイトウとヘリオトロオプを好んだ、父は櫻草のやさしい匂をゆかしむだ。二人はゲエテと同じやうに、自然をばいつも變らぬ心の友達にした。花が咲き草が芽をふく度に二人は子供のやうに喜んだ。

父は子供の頃から心臟に病があつたので、山野を跋渉して自然に親しむ機會が少かつたが、伯父はパリイにもキインにも行き、イタリア、オランダ、スエエデンと旅行し廻つた。弱い父はとても丈夫な伯父の足にはかなはなかつたので、二人一所に散歩に出るといふこともなかつた。

二

「兒童と家庭の御伽噺」(Kinder und Hausmärchen) が計畫せられたのは、グリム兄弟がカッセル圖書館時代であつた。この集成も數多い兄弟の共同勞作の尊い收穫の一つであつた。兄弟がこの勞作を成就するに至つた第一の目的が、同胞の若い少年少女達のために、淸い樂しみを分かつに在つたことはいふまでもない。一八一二年に初め

て出した「御伽噺」の第一版の獻詞には、

「小さきヨハンネス・フライムンドのために、この書をエリザベット・フオン・アルニム夫人に捧ぐ」

と記された、このフライムンドは親交のあつた詩人アキム・フオン・アルニムとエリザベット夫人との間に生まれた第一の兒、生まれてまだ幾干にもならない嬰兒の名であつた。しかし一方、同じ書の序文には、

「この「兒童と家庭のお伽噺」の集成者にとりて、この書が專ら兒童と家庭のために作られたものとのみは考へられたくない、却つて目的とするところはこれまで徒らに埋もれてゐたわれらが共同の尊き寶、國民が詩的空想の中より咲き出でたこのなつかしくうつくしき花をば再び明るい日光の下に出さんためである。」

と記されてゐる。

この第一版は今なほ私の手に保存せられてゐる。本は美しい紙に印刷せられてゐる。これにはまだ「第一卷」といふことが書かれてはをらぬ。標題の上には綠色の絹絲で、

「かの手なしむすめのために

二つあるむすめの手を喜ばむ」

といふ文句が刺繍せられてゐる。

序文の日付は「一八一二年十月十八日」となつてゐる、そのあとに伯父のヤコブが「恰かもライプチヒの戰の前一年」と書き入れた。更に父の手跡でいろいろ書き入れがしてある中に、「序文はキルヘルム作る、ヤコブ二三の補遺をなす」と記されてゐる。またヤコブの手に成つた物語が「ラプンツェル」「黄金鳥」等の三四種であることも記されてゐる。かやうにして「御伽噺」の大部分は父キルヘルムの手に成つたことが分かる。またその後第三卷(考證部)をば殆ど父の獨力で一八二一年に完成した。

父はまた第一卷の自用本に改竄の辭句を書入れてゐる外に大抵の物語にはその材料になつたもとの話を話してくれた人々の名を記してゐる。そのうちに私の母ドロテアが、まだ父の妻とならない前の名で記されてゐるのを發見する。母は一七九五年の生まれであつたから、母の名の初めて記されてゐる一八一一年には母は十六歳の少女であつた。この若い母の口から、父は中にもすぐれた御伽噺をちやうど十二種もきいたのであつた。第二卷にのせられた話のうちで、母から出たものは母が口づから私に物

語つた。正直な情ぶかい貧乏人の小娘に天から星の降りかゝる話はその一つである。母の父親キルドといふ人は、ヘルンの市民ではあるがカッセルに藥舗を開いてゐた、その近所に私の祖父が家を借りてゐた、その縁から私の父とキルド家の娘とは知り合ひになつた。その家の所有の廣い園の中で、父はまだ娘だつた母からいろいろの昔話をきいたのであつた。

かやうにグリム兄弟の御伽噺は直ちに人から口傳てに聞きとつた材料が本になつたとはいふものゝ、兄弟はたゞ口うつしをそのまゝに筆に書き殘したといふだけではなかつた。昔話を口うつしに聞いては書き集めるだけのことなら、必らずグリム兄弟を待たずとも、遲かれ早かれ他の人々の手で同じ仕事が出來上つたに違ひないと言ふものがあれば、あまりに兄弟の心勞を思はぬものである。例へば、「ヘンゼルとグレテル」の物語の初めは私の母から父のキルヘルムが聞いたには違ひないが、父が別に出した第三卷考證の卷に一々出典を擧げてある、その中に「ヘンゼルとグレテル」に就ては「ヘッセンにて得たるさまゞゝの物語より」と記してある。實際、第一版に出した物語と、その後の改訂版と比較すると、父が單に母からきいただけで滿足せず、その後も別な

材料を得るに從つて改訂補修を怠らなかつたことが分かるのである。例をこの物語の最もすぐれた一節にとる——

ヘンゼルとグレテルの兄妹が森の中に迷ひ込むで、魔女の家に辿り着く、中から魔女が、

「チップー、タップ、チップー、タップ、
戸を敲くのはそりや誰だ?」

と聲をかける、子供がびつくりする、そこへ魔女が姿を現はすことに第一版ではなつてゐる。それを後に母が更に記憶をさぐつてこの一場の景情に一層の生彩を加へた、それに依ると、子供は魔女に答へて、

「風! 風!
天の子供!」

といふ、それから魔女が出るのである。この外第一版と次々の版とを比べるとその間の改訂補修の跡の著しいのに驚く。また第三の考證を讀めば博引旁搜、一々の話に各國の童話の類似を擧げて備さに比較分析を試みてゐる。グリム御伽噺二百篇、その一

篇毎に編者の人しれぬ苦心はこめられてゐるのである。

グリム兄弟のために材料を與へたのは母のドロテアだけではない。母の實家キルド家の人々はみなにがしかの材料を寄することを惜しまなかつたのである。母の姉妹六人、その長姉も三人あつた、うちの一人、グレエチェンは容色も才智も中にすぐれてゐた、この人の口から「拇指」や「猫と鼠の組合」や「白鳥の王子」其他の物語が語られた。この人は早く嫁いで若くして身まかつた。その遺孤を私の母が手許に引取つて育てゝゐた。みな私達とは筒井筒の仲である。

私の母とグレエチェン姉妹の外には、姉妹の母キルド夫人も語手の一人だつた。この人は有名な言語學者デスナアの孫に當る人である。この夫人からも私の母は昔話をしてもらつたであらうけれど、それにも優して小さい母のために一層豐かな御伽噺の世界を開いてくれたのは、「マリイ婆や」と呼ばれたキルド家の乳母で、その夫は戰爭で死んだのであつた。この女の口から「小さな姉弟」や「赤頭巾」や「手なし娘」や「睡美人」などの美しい物語がそれからそれと語り盡きなかつた。

キルド家の姉妹達の友達にハッセンプリウグ家の二人の娘アマリイとヤネッテの姉

妹があつた。この人達の優しい唇からも美しい「雪子姫」やをかしい「ルムペルスチルツヘン」などの物語が語られた。この外にアウグスト・フォン・ハックストハウゼンやヨヂス夫人や、それから詩人アキム・フォン・アルニムなどの名が物語の語り手として記されてゐる。

一八一五年に「御伽噺」の第二巻が上梓された。序文の日附は一八一四年九月三十日である。この序文の中に新たな物語の語り手としてフィイメニン夫人といふ名が現れてゐる。この女はカッセルに近いッェエレン村に住む百姓の老婆であつた。年はとつても身體はまだがつしりしてゐて、若々しく輝く眼の光に娘ざかりの美しさを思はしめる。大變物おぼえのいゝ老人で、子供の時から耳にした昔話を細かいところまで忘れずに記憶してゐて、望むまゝに何度でもくりかへして、その度毎に筋道を少しも過たない計りか話の綾が愈々加はつたと序文には書いてある。この老婆は第一巻の時の「マリイ婆や」のやうなものであつた。丁度この書の第二版は一八一九年に出版せられたがその第二巻の扉書には「御伽噺の夫人」としてフィイメニン夫人の肖像をば末弟*ルウドヰヒ・グリムが描いて銅版畫にしたものを掲げてゐる。またその第一巻には同じ

人の手に成つた「小さな姉弟」の口繪、姉弟が森の中に相抱いて眠つてゐる、後ろに白い百合の花を持つた天使の立つてゐる畫が加へられた。この叔父は外にも澤山御伽噺のために挿畫を描いたのであるが、公にされた數は少なかつた。

かやうにして私達の兄妹は生れた時からお伽噺の世界に育てられ、この物語をそのまゝに古い古い歴史の事件のやうに思つてゐた。ほんたうに御伽噺の中の不思議はいつの世の子供にとつても新らしい不思議である。凡てその中の事件はそれ〴〵に相關聯したことのやうに思はれ、さういふ事件の入れ代り立ち代つておこる御伽噺の大きな帝國がどこぞにあるやうに思はれるのである。

凡ての時代、凡ての國民の子供は自然に對して或る共通した考をもつてゐる。即ち彼等は自然に對して、自分と同樣に生きて動いてゐるものと考へてゐる。森も丘も、火も星も、河も泉も、雨も風も人間のやうに物も言へば怒つたり喜んだりもする、そして人間の運命の中に立交つていろ〳〵な所作をすると思つてゐるのである。しかし子供ばかりではない、大人の世界でも曾ては かういふ考が國民を支配してゐた時代があつた。獨逸民族の祖先がその幼い時代に於いてどういふ信仰と、言語と、傳説とを

持つてゐたか、それを研究するのがヤコブの仕事であつた。それとは違つてキルヘルムは單に過去を追究するだけでは足りない、現在のために何かの新らしい發見を得ようと思つた。御伽噺は大部分キルヘルムの仕事であつた。彼はこれに依つて自家のために一個の創作をのこし得たのである。

一八九六年を以てグリム兄弟の記念像がハナウに建てられる筈で、私はあらかじめその原型を見た。それはキルヘルムが椅子に腰をかけ、その膝には一冊の本が開かれたまゝ置いてある、しかし彼の眼は本を離れて遠くの空虚を見つめてゐる、是は私達が子供の時分に屢々目擊したスタイルであつて、その高貴な額にはすぐれた思索が形づくられてゐるやうに見える。兄のヤコブはその傍に立つて片手を椅子の肱に置いたまゝ、窪んだ眼でぢつと何者かを探り求めるやうに本の中に見入つてゐる、いかほどすぐれた藝術もこの古今に類ひ希れな共同の精神的事業を、これほどまでに單純に、しかも物いふやうに、美しく表現することはできまいと思はれる。この銅像の臺石には、兄弟の最後の瞬間までその傍を離れなかつた私達の母の現世の姿がのこされる筈である。

—（柚山生抄）—

目次

序……一
グリム兄弟がここ〔解説に代ふ〕……一
狼と七匹の小山羊……一
蛙の王子……一九
踊り切らした靴……三一
ブレメンの音樂師……四一
猫と鼠の組合……四九
卓子と驢馬と棒……五七
ヨリンデとヨリンゲル……八一
牝鶏の死……八九
消炭さん……九五
雪の小母さん……一一二
矮人のお土産……一一九

小鳥と小鼠と蠟燭……一二五
拇指……一二九
雪子姫……一四三
ルムペルスチルツヘン……一六五
小鬼の話……一七三
大盜賊……一八一
雪子と薔薇子……一九九
赤頭巾……二一三
女狐の婚禮……二一一
狐と鷺鳥……二二五
黄金鳥……二二九
ヘンゼルとグレテル……二四五
忠義者のヨハンネス……二六三
兎の花嫁……二八三
漁夫の夫婦……二八九
鷲飼の少女……三〇九
森の家……三二三
小さな姉弟……三三五
蜘蛛と蚕……三五一
宿無しの群……三五七
黄金の鷲鳥……三六三
ラブンツェル……三七三
六勇士……三八三
青火……三九五
六羽の白鳥……四〇七
睡美人……四一九
茨の中の猫太人……四二九
アルレルライロウ……四四一
鴉……四五三
巴旦杏……四六五

挿畫

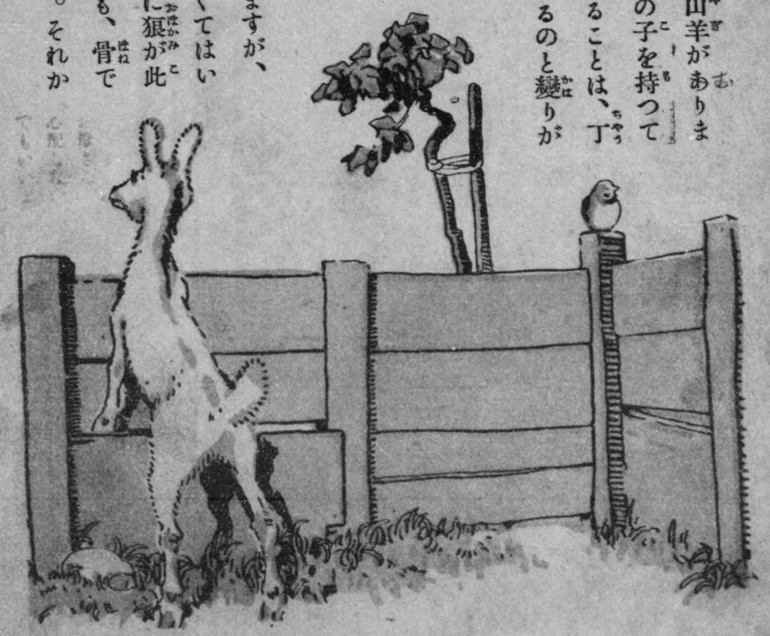
〔原色版〕

パンの家『ヘンゼルとグレテル』……表紙
玻璃棺の中の雪子姫『雪子姫』……口絵
山羊の鐸踏『狼と七匹の小山羊』……一八
「お姫様何故泣くんです？貴女の涙には石でも溶けるでせう」『蛙の王子』……二三
「ブリックルブリット！ブリックルブリット！」『卓子と驢馬と棒』……七六
七人の矮人と雪子姫『雪子姫』……一五四
祖母さんは床の中で眼が半分隠れる位寝帽子を深く被つて何だか變手古な形をして寝てゐました。『赤頭巾』……二二〇
「チップー、タップ、チップー、タップ、戸を叩くのはそりや誰だ？」『ヘンゼルと、グレテル』……二五七
「海の中の板魚や、板魚、急いでこゝまで出ておいで……」『漁夫の夫婦』……三〇〇
〔風よ吹け、吹け、キュルドヘンの帽子を吹いて、コロ、コロ、コロと吹いて行け。」『鷺侗の少女』……三二〇
鹿の家『小さな姉弟』……三四四
三太郎と黄金の鷺鳥の後へ續く行列が凡てゞ七人『黄金の鷺鳥』……三七〇
「小母さん、何をしてゐらつしやるの？」『眠美人』……四二二

むかし〳〵一匹の年寄の山羊がありました。此の山羊は七匹の子を持つて居たが、其の小山羊を可愛がることは、丁度人間の母親が子供を可愛がるのと變りがありませんでした。

或る日此の山羊は林へ食物を見つけに行かうと思つて、七匹の小山羊を集めて言ふには、

「私は今鳥渡林へ行つて來ますが、お前達はよく狼に要心しなくてはいけませんよ、若し私の留守に狼が此處へ來たら、お前達の皮でも、骨でもみんな食べてしまふから。それか



ら狼はよく化けて來るが、嗄聲と黑い趾で直ぐ分るからね」

すると小山羊達は、

「お母さん、僕等はお母さんの言ふ通りにして待つてゐるから、心配しないでもいいよ。」

と言つたので年寄の山羊は安心して一鳴鳴いて、林の方へ駈けて行きました。

少時すると誰か小屋の戸をトン〳〵と叩いて、

「子供達や、開けとくれ、お母さんだよ、みんなに好い物を持つて來たよ」

と言ひます。

けれども小山羊達は、嗄聲をしてゐるから狼に違ひないと思つて、

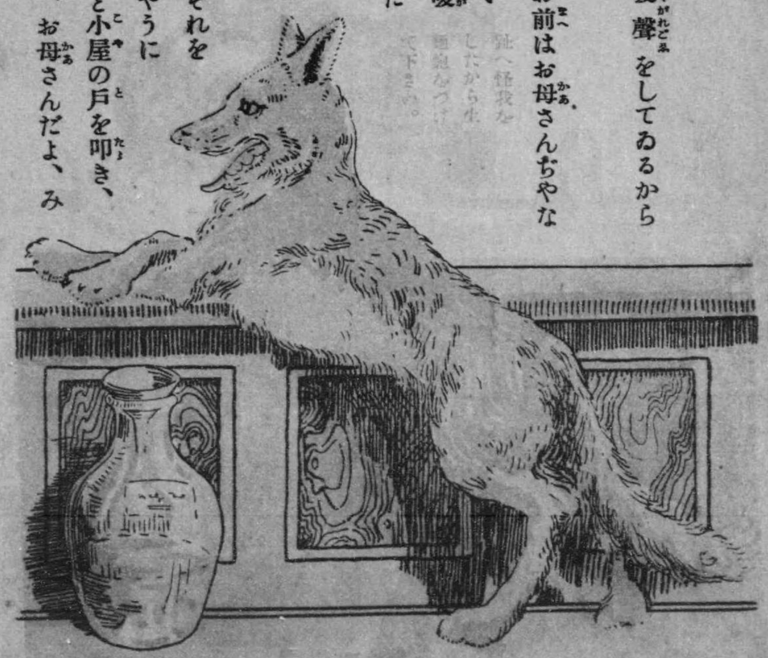
「開けない、開けない、お前はお母さんぢやない、お母さんの聲は優しい美い聲だよ、お前の聲は嗄れてゐるから、お前は狼だよ」

と言ひました。

其處で狼は店へ行つて、白墨の大きな塊を買ひ、それを食べて、優しい聲が出るやうにして、又戻つてトン〳〵と小屋の戸を叩き、

「子供達や、開けとくれ、お母さんだよ、みんなに好い物を持つて來たよ」

と言ふ。



けれども狼は眞黒な前趾を窓の敷居へ載せたので、小山羊達はそれへ眼をつけて、

「否、開けない、開けない、お母さんはそんな黒い趾をして居ないお前は狼だよ」

と言ひました。

其處で狼は麵麭屋へ行つて、

「趾へ怪我をしたから、生麵麭をつ

けて下さい」

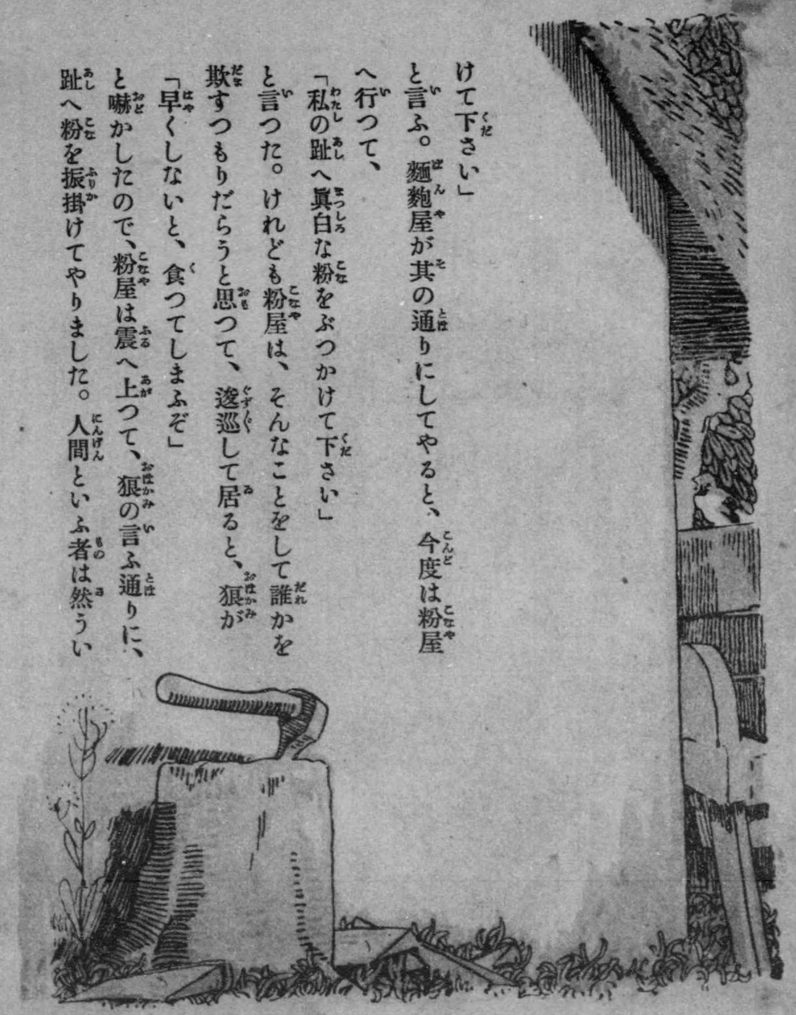
と言ふ。麵麭屋が其の通りにしてやると、今度は粉屋へ行つて、

「私の趾へ眞白な粉をぶつかけて下さい」

と言つた。けれども粉屋は、そんなことをして誰かを欺すつもりだらうと思つて、逡巡して居ると、狼が

「早くしないと、食つてしまふぞ」

と嚇かしたので、粉屋は震へ上つて、狼の言ふ通りに、趾へ粉を振掛けてやりました。人間といふ者は然うい



ふ臆病者です。

さて惡者は三度目に小屋へ行つて、トン〳〵と戸を叩いて、

「子供達や、開けとくれ、お母さんだよ、みんなに林から好い物を持つて來たよ」

と言ふと、小山羊達は中から

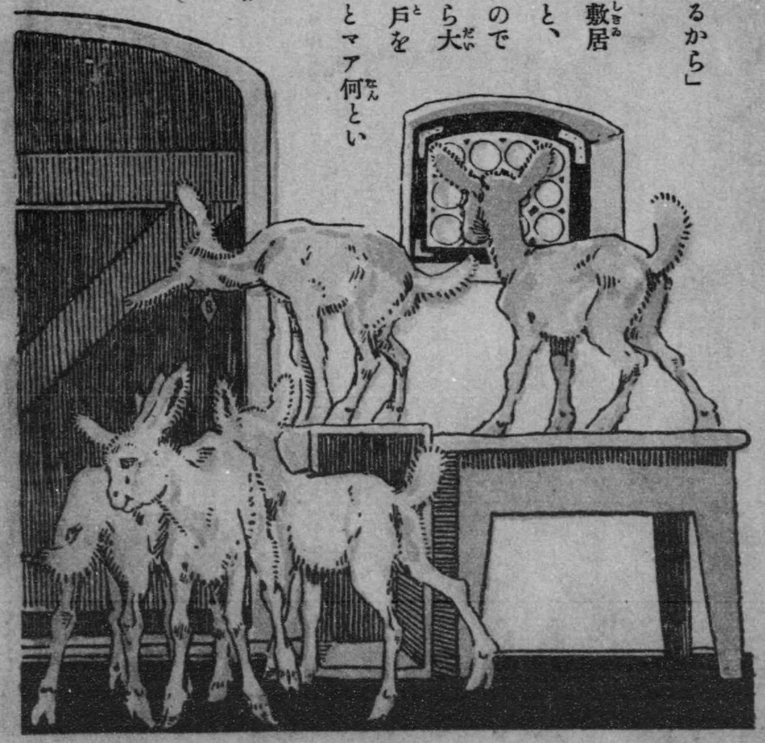
「趾をお見せ、本當にお母さんだ

か何うだか見てやるから」と言ひました。

其處で狼は窓の敷居の上へ趾を載せると、其の趾が白かつたので小山羊達はこれなら大丈夫だと思つて、戸を開けました。するとマア何といふことでせう？

お母さんだとばかり思つて居たのに、入つて來たのは狼です！

小山羊達は吃驚



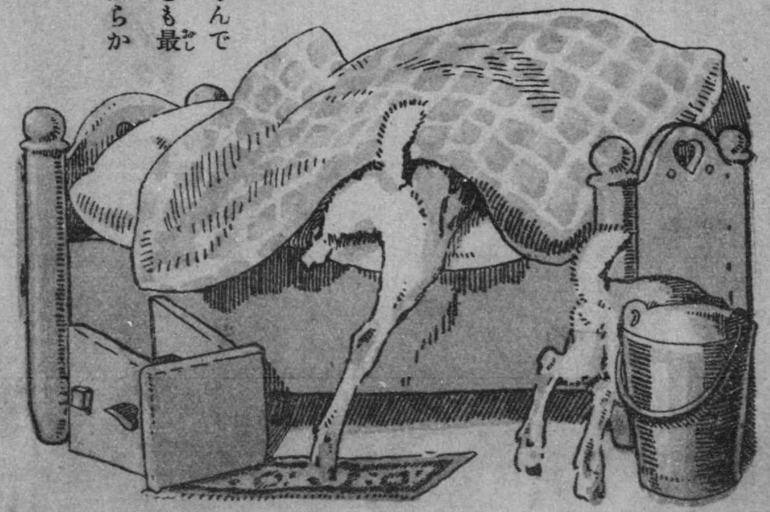
して、隱れようと思つて、一匹は卓子の下へ、二番目は寢床の中へ、三番目は戸棚へ、四番目は臺所へ、五番目は竈の中へ、六番目は洗濯桶へ、七番目は時計の函へ逃込みました。

けれども狼は直ぐに見付け出して、一刻の猶豫もなく、片端から一つ一つ丸呑にしてしまひましたが、たゞ一匹一番幼い、時計の函へ隱れた山羊だけが、見付かりませんでした。

狼はお腹が膨れたので、ノソ〳〵と出掛けて行つて、青々とした牧場ま

で來ると、一本の樹の蔭へ、ゴロリと轉がつて、其のまゝグウ〳〵と寢込んでしまひました。

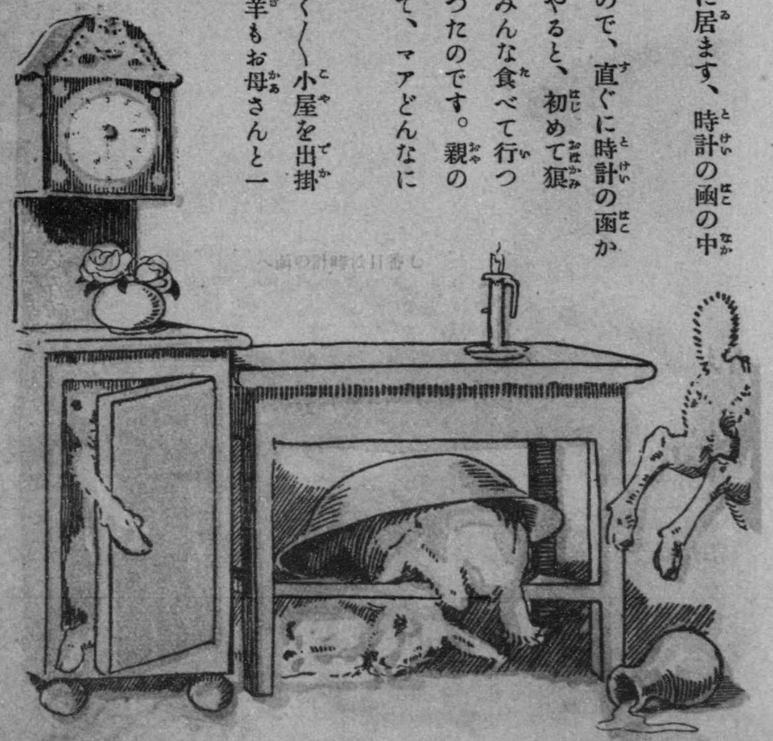
程なく年寄の山羊が林から歸つて來ましたが、マア、何といふ有樣でせう！　小屋の戸は開放しになつて、卓子も、椅子も、腰掛も轉覆り、洗濯桶はバラ〳〵に壞れ、敷布や枕は寢臺から引落されて居ます。いくら搜しても、子供達は何處にも居ない。一人々々名を呼んで見たが、誰も返事をしません。けれども最後に一番末の子の名へ來ると、何處からか小さな聲で、



「お母さん、此處に居ます、時計の函の中に」

と言ふのが聞えたので、直ぐに時計の函から其の子を出してやると、初めて狼が來て、他の者をみんな食べて行つたといふことが分つたのです。親の山羊はそれを聞いて、マアどんなに泣いたでせう。

最後に山羊は泣く〳〵小屋を出掛けました。幼な山羊もお母さんと一緒に駈けて行きます。其の内に牧場へ來ると、狼は樹の下へ長くなつて



樹の枝も搖く位の大きな鼾をかいて、寢込んで居る。山羊は前へ廻つたり後へ廻つたりして、よく〳〵狼の容子を見ると、腹の中で何かムク〳〵と動いたり、跳ね廻つたりしてゐる物があります。

「ア、、難有い！　飲まれた子供達はまだ生きて居る！」と山羊は胸の中で言つて、急いで家へ歸り、鋏と針と糸を取つて來て、狼の毛だらけの衣服を切開きました。少しばかりの口が開くと、もう一匹の山羊が其處から頭を出す、それからもう少し口を開けるか開けない中にもうピヨコ〳〵と可愛らしいのが一匹宛跳出して來ました。而して六匹が六匹とも傷一つつかずに、ピンピンして居りました。狼は食べる時にあんまり急き込んで、生きたまゝ丸呑にしてしまつたのです。

山羊のお母さんも小山羊達も、マアどんなに嬉しがつたでせう！　小山羊達は直ぐにお母さんに抱きついて、其の周圍をピヨン〳〵

親の山羊は
それを聞いて
マアどんなに
泣いたでせう。

跳ねまはりました。

けれども年寄の山羊は子供達を制して、斯う言ひました。

「早く行つて大きな石を拾つておいで、怪物が眼を覺まさない中に、お腹へ詰込んで置くのだから」

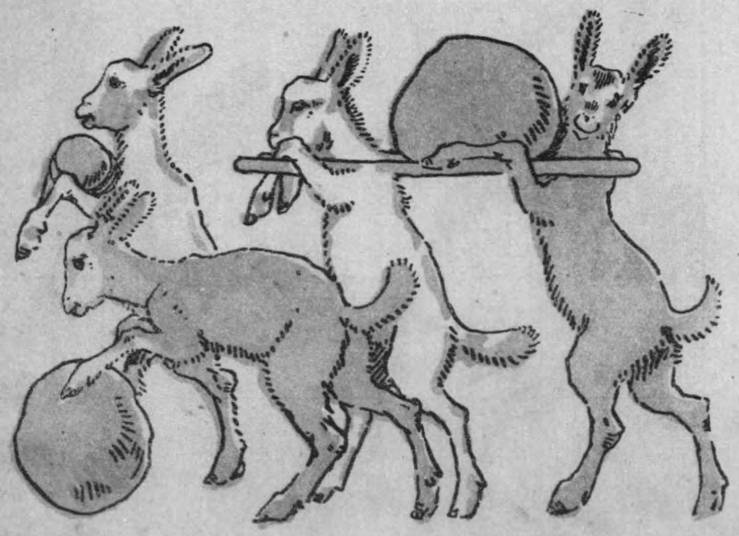
其處で七匹の小山羊は大急ぎで石を運んで來て、それを狼の腹へ入るだけ詰め込むと、お母さんの山羊は、直ぐに狼の側へ行つて見て、狼がまだ死んだやうに寢込んで居て、ピクリともしないのを見定めて、手早く切口を縫つてしまひました。

とう〳〵狼は眼を覺まして、起き上

りましたが、お腹に石が入つて居るので、咽が渴いてたまりませんから、水を飲まうと思つて河の方へ行きました。而して彼方へヨロ〳〵、此方へヨロ〳〵、よろけながら、河の方へ歩いて行くと、體の中では石塊がゴロ〳〵と轉げ廻るので、狼は斯う歌ひ出しました——

「ガラ〳〵ガラ〳〵何が鳴る、
俺の骨へ打突るのは何だ？
小さな山羊ではないやうだ、
大きな石でもあるやうだ」

而して狼は河の縁へ來て、水を飲

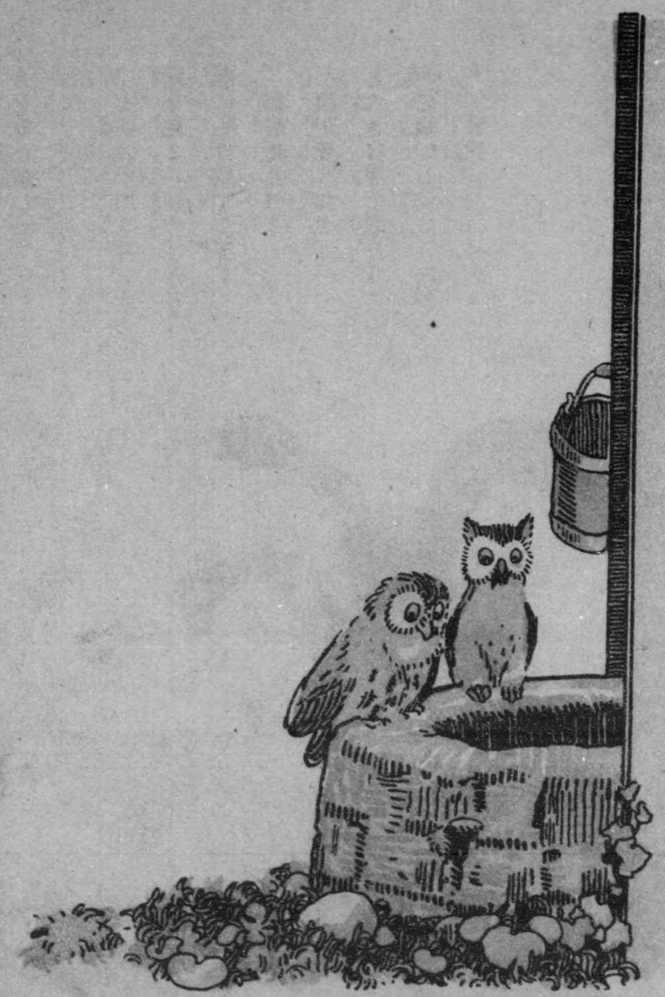


まうとして前へ屈みましたが、其の拍子に、石の重味で體の釣合を取り損なつて、ズル〳〵と水の中へのめり込んでしまひました。

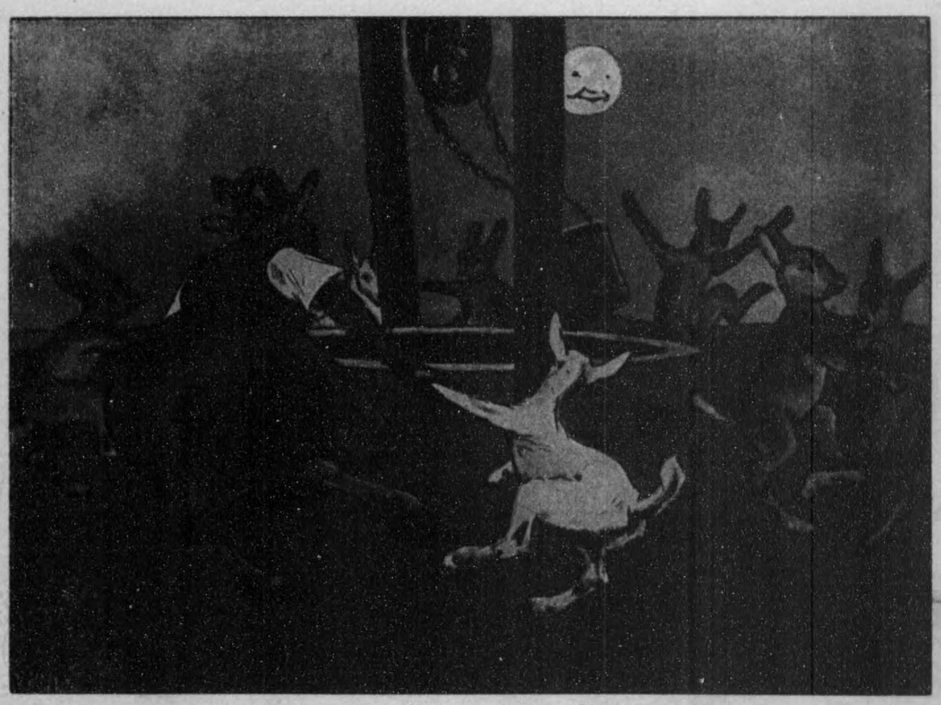
七匹の小山羊は、此の有様を見るや否や、みんな一散に駈け出して來て、

「狼が死んだ！
狼が死んだ！」

と大きな聲で歌ひながら、河の縁でお母さんを取巻いて、狂氣のやうに踊りました。



「！だん死が狼！だん死が狼」



山羊の舞踏

蛙の王子

むかし〳〵大昔、願つたことはまだ何でも叶つた時代に、一人の王様があつて、美くしいお姫様を幾人も持つてゐました。其の中でも優れて美くしいのは一番末のお姫様で、此の方が日向へ出て來ると、いつも見て居る太陽でさへ其の姿に見惚れるといふ位でした。

此の王様の城の近邊に大きな鬱葱とした森があつて、其の眞中に枝を擴げた科の木の老木の根元に、一つの小さな泉が噴出して居ました。

で、暑くなると此の末のお姫様はいつでも此の森の中へ駈へんで、此の泉の側へ行つて坐つて居ました。而して退屈して來ると、よく黄金の毬を空へ投げて、下で受取つたりなぞして氣を紛らして居りました。これが此のお姫様の一番お氣に入りの遊びでした。

或日のことお姫様の投つた黄金の毬が、生憎手を外れて、草の上へ落ち、それからゴロ〳〵と泉の方へ轉がつて行きました。お姫様が毬の後を見送つてゐると、毬は水の中へ跳込んで見えなくなつてしまひました。其の水は誰にも底が見えない程深いのです。

お姫様は悲しくなつて、大きな聲をして泣き出しました。お姫様が泣き出すと、何處かで聲がして、

「お姫様、何故泣くんです？　貴女の涙には石でも溶けるでせう」

と言ひます。お姫様は聲のした方を見廻すと、一匹の蛙が其の醜い頭を水の上へ突出してゐるのが目に入つたので、

「ア、、お前かへ、今口を利いたのは？」とお姫様が言つた。「私は今黄金の毬が水の中へ辷つて行つたので泣いて居るの」

「お默んなさい、ね、泣かないで」と蛙が言ふ。「私がいゝことを敎へてあげませう。けれども若し私がその手遊を取つてあげたら、私に何を下さいます？」

「蛙さんは何が欲しい？」とお姫様が尋ねる。「此の着物？此の眞珠や寶石？私の被つ

てる此の黄金の冠？」

「着物や寶石や黄金の冠なんぞは要りません」と蛙は答へました。

「が、若し貴女が私を愛して下さるなら、私を貴女のお友達にして下さるなら、而して貴女の食卓へ坐つて、貴女の小さな黄金の皿で食べ貴女の洋杯で飲み、貴女の可愛らしい寢床で寢かして下さるなら――これだけのことを約束して下さるなら、私は直ぐ水の中へ潜つて、黄金の毬を取つて來ます」

するとお姫様は、

「エ、、本當に私の黄金の毬を持つて來て呉れるなら、その通り約束するわ」

と言つたが、心の中では「蛙のお馬鹿さんが何を言ふんだらう？　自分の仲間と水の中に居れば澤山だ、人間の中へ入らうなんて贅澤を言つてる」と思つてゐました。

けれども蛙はお姫様の約束を聞くと直ぐに水の中へ頭を引込めて、底の方へ潜つて行つた。すると間もなく今度は黄金の毬を口に啣へて浮上がつて來て、其の毬を草の上へ投りました。お姫様は其の美くしい手遊を見ると大喜びで、それを拾ふと一散に駈けて行つてしまひました。蛙は驚いて、

「お姫様何故泣くんですか？」
貴女の涙には石でもとけるけしうせて

「待つて下さい！　待つて下さい！　私も一緒に行きますから、私にはそんなに駈けられませんから」

と後から呼びました。けれども蛙がいくらギャー〳〵言つても無駄でした。隨分大きな聲を出したのですが、お姫様は耳にもかけないで、スタ〳〵と御殿へ歸つて、直きに蛙のことなんか忘れてしまひました。蛙はガッカリして又元の泉へ躍込むより外に仕方がなかつた。

其の翌日お姫様がお父様や御殿の人達と一緒に食卓に向つて、自分の小さな黄金のお皿で食事をしてゐますと、ピン〳〵ピョン〳〵と、大理石の階段を上つて來るやうな音が聞こえました。而して階段を上りきると、トン〳〵と扉を叩いて、

「開けて下さい、一番末のお姫様！」

と言ひます。

で、お姫様は立つて、誰が來たのかと思つて行つて見ましたが、扉を開けると昨日の蛙が立つてゐるので、大きな音をさせて開けかけた扉を閉めて、眞青な顔をして、食卓の前へ坐りました。けれども王様にはお姫様が胸をドキ〳〵させてゐるのが分り

ましたから、扉の外に立つてゐるのは何か、お前を攫つて行かうと思つて、大入道でも來たのではないかと尋ねると、お姫様は

「否、大入道なんぞではありません、醜い蛙なんです」

と言ふ。王様は又

「蛙が何をしに來たのです？」

と聞きますので、お姫様は

「お父様、私が昨日泉の側で遊んでゐますと、私の黄金の毬が水の中へ落ちました。私が泣いてゐましたらあの蛙が取つて呉れたのです、けれども其の前に無理にあの蛙をお友達にする約束をさせました。私は蛙が水の中から上つて來ようとは思つてゐなかつたのですが、何うにかして跳出して來て、今此處へ入れて呉れろといふのです」

と譯を話しました。

其の時又トン〳〵と扉を叩いて、

「一番末のお姫様、
開けて下さい。

科の木の影になつた
あんなに澄んだ泉の側で
貴女は何と言ひました？
一番末のお姫様、
開けて下さい。」

と歌ふ聲が聞こえます。

「約束は、守らなければなりません。」と王様が言つた。「行つて入れ（おやり」

お姫様が立つて行つて扉を開けると、蛙はお姫様の後へついて、ピョン〳〵と椅子の所まで跳んで來ましたが、お姫様の坐るのを待つて、言ひました——

「私も其處へ坐らせて下さい」

それでもお姫様は王様が載せておやりと言ふまでは躊躇してゐました。蛙は椅子の上へ上ると今度は食卓の上へ載りたいと言ふ、而して食卓の上へ坐ると斯う言ひました。

「そのお皿をもう少し此方へ寄せて下さい、一緒に食べられるやうに」

「下さいゝ一緒に食べられるやうに」

「そのお皿をもう少し此方へ寄せて」

お姫様は言ふ通りにしてやつたが、それが如何にも嫌さうにしてゐることが誰の眼にも見えました。

蛙は如何にも美味さうに食べてゐましたが、お姫様は食べる物が、一片宛咽へつかへさうです。其の中に蛙はもう散々食べてから、斯う言ひました——

「お腹が張つたら、疲労が出て來ました、二階の貴女の部屋へ連れてつて下さい、而して二人で寢られるやうに寢床の支度をさせて下さい」

これを聞くとお姫様は泣き出しました。此の冷い蛙が恐ろしくなつたからです。もう觸るのも心持が惡いと思ふ位なのに、其の上自分の綺麗な、清潔した床の中へ寢たいといふのですもの、けれども、お姫様の涙を見ると、王様は大變に腹を立つて、

「お前が困つた時、約束したのだから、其通りにしなくてはなりません！」

と言つたので、お姫様は澁々二本の指で蛙を摘み上げて、ソッと自分の部屋の隅へ置きました。

けれどもお姫様が寢床へ入ると、蛙はピョン〳〵跳んで來て、斯う言ひます——

「私は大變疲労たから、寢たくつてたまりません、私を入れて下さい、入れなければ

貴女のお父様に然う言ひます」

これを聞くとお姫様はカッとなつて、いきなり蛙を攫み上げて、

「さア、かうしたら靜かになるだらう、この蛙め！」

と言ひながら、力任せに壁へ叩きつけました。

けれども蛙は床の上へ落ちるや否や美しい眼を持つた立派な王子の姿に變つてしまひました。而して程なく王様の許しを受けて、お姫様のお婿さんになりました。其の時此の王子は、自分が或る意地の惡い魔女のために蛙にされたことや、此のお姫様の外には自分をあの泉から救出すことの出來る者が此の世になかつたことなんぞを話して、明日は一緒に國へ歸らうと言ひました。

翌朝日が昇るや否や、八頭の白馬に曳かれた一臺の馬車が、此の御殿の入口へ曳込まれた。其の馬は何れも駝鳥の羽を頭へ飾り、黄金の馬勒をつけ、馬車の背後には此の王子の從者の忠義者のハインリヒが立つて居ました。王子が蛙に變つた時此の忠義者のハインリヒの嘆きはどんなでしたらう。其の嘆きと悲みで心の臓が破裂しさうだつたので、鐵の帶を三筋も胸の周圍へ卷いた位でした。けれども今は若い王子を再び

本國へ送つて行く馬車の支度が出來たので、此の忠義者のハインリヒは花嫁と花婿を乘込ませた後、自分も後の席へ着いて、主人の自由になつたのをひとりで喜んで居りました。

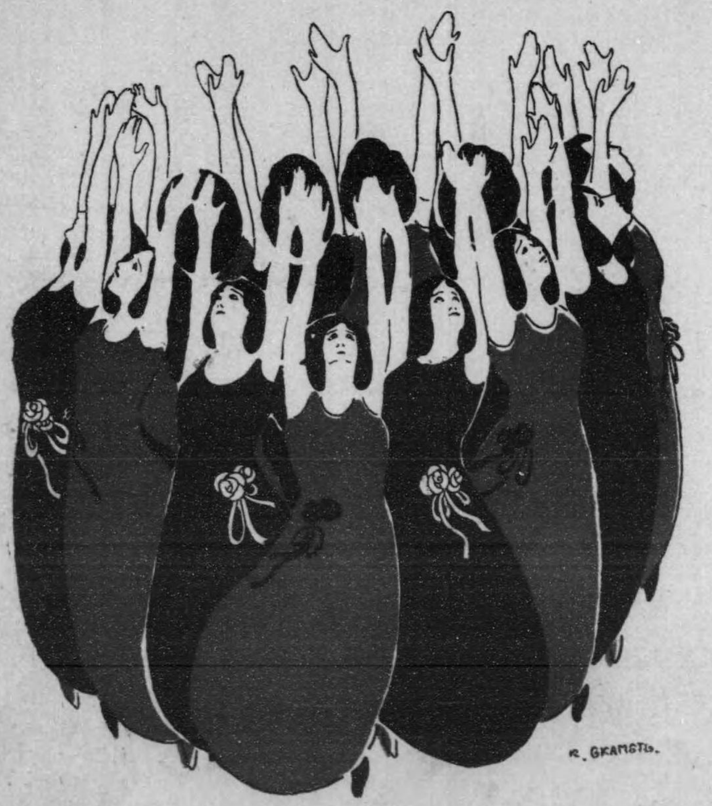
馬車が動き出すと間もなく、後部の方で何か彈けでもしたやうな大きな音が聞えましたから、王子が窓から頭を出してハインリヒに何が壞れたのかと尋ねますと、ハインリヒは、

「旦那樣、壞れたのは馬車ではありません、貴方樣が蛙に變つたので、私がいかいこと嘆きました時、胸へ卷いて置いた帶が彈けたのです」

と答へた。

それから後も二度程同じ音がして、其の度毎に王子は馬車の何處かが壞れたのだと思ひましたが、それは矢張忠義者のハインリヒの胸へ卷いた帶の彈けた音でした、而して其れ以來ハインリヒは自由になり、幸福になりました。

踊り切らした靴



むかし〳〵一人の王様があつて、揃ひも揃つて美〳〵しい十二人の王女を持つて居りました。十二人の王女はいつも一つの部屋へ寢臺を一列に並べて、一緒に寢るのでしたが、毎日日が暮れて王女達が寢てしまふと、王様は部屋の扉をピッシャリと閉めて閂をかつてしまひます。

或る朝王様がいつもの通り此の部屋の扉を開ける時、王女達の靴がすつかり踊り切れてゐるのに氣がつきましたが、誰も其の理由を知つた者がありませんでした。其處で王様は一つの布令を出して、十二人の王女が毎晩踊りに行く場所を發見けだした者には、其の中の一人を妻に與つて、自分が死んだ後は王位を繼がせようと言ひました。けれどもそれを志願する者は、若し三日三晩の中に目的を達しなかつたら、殺されてもよいといふ約束をしなければなりません。

少時すると一人の王子が來て、自分がやつて見ようと申出しました。王子は鄭重な取扱を受けて、日が暮れると、王女達の寢室に續いた室へ案内された。其處で王子は王女達が何處へ踊りに行くか氣をつけて居ようと言ふのです。而して王女達が潛と

抜出して行かないやうに、寢室の扉は王子の部屋から見えるやうに開放してありました。

けれども王子は直きに眼の前へ霧がかゝつて來たやうになつて、ウト〳〵と眠つてしまひました。而して朝起きて見ると、王女達の靴はみんな底が踏拔いてあるので、其の晩もいつもの通り踊つてゐたといふことが分りました。二日目の晩も三日目の晩も、其の通りでしたから、朝になつて此の王子は容赦なく首を刎ねられてしまひました。其の後幾人も幾人も來て、やつて見ましたが、無事に歸つた者は一人もありませんでした。

或る日傷のために癈人になつた一人の貧乏な武士が、此の王様の御殿のある町へ入る街道を歩いて來ました。其處で武士は一人の老女に逢ふと、老女が何處へ行くのかと聞きました。

「行く先は自分にも分らないのです」と武士が言つた。「たゞ王女が靴を踊り切らすといふ噂の所へ行つて、其の秘密を發見して、王にならうかとも思つてゐます」

「それは譯はないよ」と老女が言つた。「日が暮れてから持つて來る酒を飲まずに、眠

つたやうな風をしてゐさへすればいゝのだ」
然う言つて老女は一つの上衣を呉れて、これを着てゐれば誰にも姿を見られないから王女達の後をつけて何處へでも行けると言ひました。
武士は此の助言を聞くと、急に勇氣が出て、志願者として王様の前へ出ました。武士は他の志願者と同じやうに鄭重な取扱を受けて、王子のやうに立派な衣服を着せられました。日が暮れると武士は寝室へ案内された。寝る支度をして居ると、一番上の王女が酒の入つた杯を持つて來ましたが、武士は咽の下へ袋を結びつけて、飲む風をして其の中へ酒をみんなこぼしてしまひました。
其處で武士は寝床へ入つて、少時すると、如何にもよく熟睡んだやうに、大きな鼾をかき初めました。すると十二人の王女は口々に、「世話が無くつていゝわね！」と言つて、互に笑ひ合ひました。而して二三分するとみんな立つて、戸棚や、押入や曳出を開けて、色々な美くしい着物を出しました。銘々に着飾り、鏡の前へ行つて自分達の姿を見てしまふと、もう踊り出した。けれども一番下の王女は斯う言ひました、
「何うしてそんなに面白いんでせう、私は何か惡い事でもありさうで胸騒ぎがしてし

かたがないわ！」
「何て阿呆だらう！」と一番上の王女が言つた。
「お前はいつでも悒々してゐるんだよ、もう幾人の王子が生命を亡くしたかお前だつて忘れやしまい？　私が此の武士に睡眠劑を飲ませなかつたら、此の馬鹿者が今でも眼を開いてる筈ぢやないか？」
で、すつかり支度が出來てしまふと、王女達は先づ武士の方を覗いて、武士が眼を緊乎と瞑つて、石のやうに動かずにゐるのを見て、もう大丈夫だと思つた。それから一番上の王女が自分の寝臺をトン／＼と叩くと、それがスーッと地の下へ入つて行く、其の孔から一番上の王女を先立に、十二人の王女が地の下へ降りて行きました。
武士は一伍一什を見屆けると、直ぐに隱れ上衣を着て、一番末の王女と一緒に降りて行つた。階段の中程で過つて王女の裾を踏むと、末の王女は驚いて、聲を立てた、
―――
「私の上衣を捕へるのは誰だへ？」
「馬鹿なことをお言ひでない」と一番上の王女が言つた。「釘か何かへ引掛けたんだよ、

何でもありやしない」

みんなが階段を降りきつてしまふと其の下には不思議な並木路が開けて、其の木の葉はみんな銀色をして、キラ〳〵と光り輝いてゐた。武士は證據に一枝折つて行かうと思つて、それを折ると、大きな音がしました。

「オヤ、變だわ！」と末の王女が聲を立てた。「今の音を聞かなくつて？」

「祝砲だよ！」と一番上の王女が言つた。「私達の幸福を祝つたのだよ」

其の並木を拔けると、今度は金色の葉を持つた並木へ來る、それを越すと木の葉が金剛石のやうに輝く次の並木へ來た、武士は兩方の並木から一枝宛折ると、其の度毎に大きな音がして末の王女が驚いて聲を立てる、けれども上の王女がいつも歡迎の祝砲だと言つて打消してしまひました。

然ういふ風にして長いこと行くと、一つの湖の畔へ來た。其處には十二艘の小舟があつて、其小舟には一人宛美くしい王子が乘つてゐて、銘々に一人宛王女を自分の舟へ乘せました。武士は末の王女と同じ舟へ乘つた。

「何ういふ譯か分らないが」と其の舟に居る王子が言つた。「どうもいつもより舟が重

いやうだ、僕は有りたけの力を出して漕いでるんだよ」

「それは陽氣が暖いせいでせう」と末の王女が言つた。「私だつていつもより大變暑いのですもの」

湖の對岸には一つの立派な城があつて、中にはカン〳〵と燈火がついて、喇叭や提琴の奏する音樂が爰までも聞えて來る、其の城の方へ王子達は舟を漕ぎつけて、中へ入ると、銘々に自分の相手と手を執つて踊りました。其の間に武士も姿を見られずに大勢の中で踊つてゐた。が、杯が誰かの手へ廻ると、武士は潛とそれを飲んでしまふので、口へ持つて行つた時には、杯はいつも空虛になつて居た。それで末の王女は又もや氣を揉み出したが、上の王女が制して何も言はせませんでした。

爰でみんなは朝の三時まで踊つて居たが、其の時間が來ると、みんなの靴へ穴が明いてしまつたので、仕方なしに踊りをやめました。王子達はまた水の上を漕ぎ戻つたが、今度は武士は一番上の王女と同じ舟へ乘りました。岸へ着くと王女達は王子達に別離を告げて、又次の晩に逢ふ約束をしました。

みんなが階段の下へ來ると、武士は一番先へ駈け上つて、自分の床の中へもぐり込

んで、十二人の王女が、疲勞して、睡むさうに上つて來た時には、みんなが、

「マア、何てよかつたんでせう」

と言つた位、大きな鼾をかいて、眠てゐました。

次の朝になつても武士は何にも言はずに、もつと此の不思議な仕事を見たいと思ひました。それで二日目の晩も、三日目の晩も、初の晩と同じやうに過ごしました。王女達はいつも靴の底へ穴のあくまで踊つた。而して武士は尙ほも此の話の證據にしようと思つて舞踏室から杯を一つ持つて歸りました。

いよ〳〵返答をする時になつて、武士は先づ木の枝や杯を身の周圍へ隱して、王の前へ出ました。其の間十二人の王女は扉の背に立つて、武士の言ふことを聞いてゐました。

「俺の娘達は夜中何處で踊つて居つたかな！」と王が尋ねた。

「十二人の王子と地の下の城で」と武士が答へた。而して自分の見た一伍一什を話して、其の證據に三本の枝と一つの杯を出しました。

すると王は王女達を呼んで、武士の言つたことが本當かと尋ねました。王女達も武

士の言ふ通りに違ひないと白狀しましたので王は更に武士に向つて、どの娘を妻にしたいかと聞きました。

「私はもう年を取つて居ます」と武士が答へた。「ですから一番上の方が宜しうございます」

其處で即日結婚式が擧げられ、武士は此の國の繼嗣になりましたと、さ。

ブレメンの音樂師

或る人が一匹の驢馬を持つて居ました。此の驢馬は永年の間よく働いたが、今ではもう年を老つたので、日増に力が抜けて次第に役に立たないやうになりました。すると主人は此の驢馬を殺して皮にしたら幾何になるだらうと心の中で計算をしてゐましたが驢馬は早くも風向が惡くなつたのを見て取つて、其所を逃げ出して、トッ〳〵とブレメンの方へ駈けて行きました。

「彼所へ行けば、町の樂隊へ入れるだらう」

と驢馬は考へたのです。

少し行くと路傍に一匹の獵犬が、如何にも疲勞れたやうに、ハア〳〵と息を喘ませながら、寢て居ました。

「オイ、親方、君は何でそんなにハア〳〵言つてゐるんだえ?」と驢馬が聞いた。

「アヽ」と獵犬が答へた。「僕は日増に年を老つて、弱つて行くだらう、僕にはもう獵

には行けないやね、それで主人が僕を撲殺さうとするから、やう〳〵のことで逃げて來たのだが、これから何うして生きて行かうかと思つてる所さ」

「ナーニ、譯はないよ」と驢馬が言つた。「僕はブレメンへ行つて町の樂隊になるつもりだが、君も一緒に來て、樂隊の仲間になるといゝよ、僕が琵琶を彈くから、君は太鼓を打つさ」

で、犬が承知したので、二匹は一緒に出掛けました。

直きに二匹は一匹の猫に逢ひました。猫は道中に坐つて、三日も降續いたやうなむづかしい顏をして居たが、

「オヤ、昔の若い衆、何だつてそんなむづかしい顏をして居るんだえ?」

と驢馬が聞くと、

「今首を絞められようつていふのに、ニコ〳〵して居られるかへ?」と猫が答へた。

「私は年が寄つて、齒が惡くなつたので、此の頃ぢやア鼠子を逐驅けるよりは、火の側でゴロ〳〵言つてる方がよくなつたものだから、家のおかみさんが私を河へ沈めようつて言ふのさ、だから駈け出して來たんだが、矢張り好いことは無いので途方に暮

れてゐる所なんだよ」

「ブレメンへ一緒においで。お前は夜の音樂が出來るから、町の樂隊になれるよ」

で、猫も賛成して、一緒に出掛けました。

三匹の旅人が程なく一軒の農家の庭を通ると、納屋の入口で一羽の鷄が聲を張揚げて鳴いて居ました。

「君は然う夢中になつて鳴いて居るが」と驢馬が言つた。「全體何事があるんです？」

「僕はかうして其の日其の日のお天氣を知らせて、襯衣を洗濯しても大丈夫だと豫告するのだよ」と雄鷄が言つた。「けれども日曜日には大勢お客が來るので、主婦さんが僕をスープにしろと料理人に言付けて居たから、今夜は首を斬られなければならないんだ。だから鳴ける間だけ有りつたけの聲を出して鳴いてるのさ」

「ア、、だが、雄鷄君」と驢馬が言つた。「寧そのこと僕等と一緒に來たら何うだ。僕等はブレメンへ行く所なんだが、兎に角死ぬよりはましだらう、君は美い聲を持つて居るんだから、若し皆なして一緒にやつたら、立派な樂隊が出來るだらう」

で、雄鷄も此の計畫に同意したので、四匹は一緒に出掛けました。

けれども一日ではとてもブレメンへは行けなかつた。日暮方に一つの森へ來たので、其處で泊ることになつた。驢馬と犬は一本の大木の下へ寢ることになり、猫と雄鷄は枝の上へ登つて行きました。中にも雄鷄は木の頂上へ飛上つて、一番安全な場所を取りました。而して寢る前に先づ其處から四方を見廻すと、遠くの方に一點の火が見えるやうな氣がしましたので、仲間を呼んで、火が見えるから近くに家があるに違ひないと言ひました。

すると驢馬が、

「そんなら起きて其處まで行つた方がいゝ、此處は塲所がよくないから」

と言ふ。犬も一緒になつて、

「然うだよ、本當だよ！　肉のついた骨位にはありつけるかも知れない！」

と言ひました。其處で一同は火の見えた方角へ急いで行つて見ると、其の火がだん〳〵明るくなつて、とう〳〵カン〳〵と、燈火のついた盜賊の小屋の前へ出ました。

驢馬が一番背が高いから先づ窓の所へ行つて、中を覗きました。

「驢馬君、何が見えるね？」と雄鷄が尋ねた。

「何が見えるつて？」と驢馬が答へた。「旨さうな食物や飲物が一杯並んだ食卓があつて、盗賊共が其の周圍で、パクついて居るよ」

「それは我々に持て來いだ」と雄鷄が言つた。

「然うだ、然うだ、何うかしてあすこへ坐りたいな」と驢馬が答へた。

其處で一同は盗賊を逐出す工夫を相談しましたが最後に一つの方法を考へ出しました。其の方法といふのは驢馬が窓の出張へ前趾を掛けると、獵犬が其の背中へ乘り、猫が又犬の上へ登り、最後に雄鷄が飛上がつて猫の頭へ棲まるのです、而して此の用意が出來上ると、一つの合圖でみんなが一緒に樂隊をやり出すのです。其處で驢馬は嘶き、犬は吠え、猫は鳴き、雄鷄は鬨を作りましたので、一時に大變な騒ぎが起こつて、窓の玻璃が震へる位でした。

此の不思議な恐ろしい音を聞くと、盗賊等は吃驚して、あはてゝ起上りましたが、これは何か妖怪の仕業に違ひないと思つて、林の中へ逃げ込んでしまひました。其處で四匹の仲間は直ぐに食卓の前に坐り、まるで一月も食べないで居たやうに、ガツ〳〵して、殘つてゐた物をすつかり平げてしまひました。

四人の音樂師は食事をすますと、燈を吹消して、銘々に自分の性質と習慣にあふやうな寢所を見つけました。驢馬は肥堆の藁の上へ、獵犬は扉の蔭へ、猫は爐の中の溫い灰の側へ、雄鷄は梁の上へ飛上りました。而してみんな永い旅に疲勞て居たので、直ぐにぐつすりと寢込んでしまひました。

夜半頃に盗賊等が隱家から潛と家の方を覗いて見ると眞暗になつて靜まり返つて居るので、親方が、

「こんなに騒ぐことはなかつたのだ」

と言つて、一人の子分に樣子を見に行つて來いと言ひつけました。子分が行つて見ると、家の中は森として居るので、燈火をつけようと思つて臺所へ行き、猫の眼が火のやうに光つて居るのを石炭の火と思違へて、火をつけるつもりで、燐寸を突出しました。けれども猫は何をされるのかと思つて、いきなり顏に跳着いて、引搔くやら、爪を立てるやらしたので、子分は吃驚して背後の扉から跳出さうとすると、其處に居た犬が、跳上つて、脚へ喰付いた。盗賊は跛足を曳き曳き肥堆の方へ駈けて行くと、其處に寢て居た驢馬が後足でいやといふ程蹴飛した。それぱかりか、雄鷄も此の騒ぎで

眼を覺まして、梁の上で「コケコーヨー、コケコーヨー」と鳴き出しました。

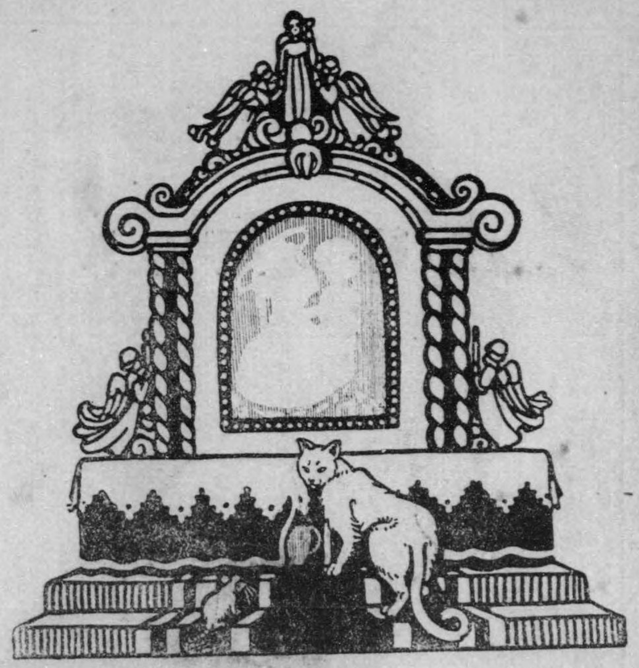
盜賊は一目散に親分の所へ逃歸つて、言ひました。

「ア、、親方、あの家には恐ろしい魔女が住んで居て、私を打ちました、而して長い爪で私の顏を引掻きました。それから扉口には小刀を持つた奴が立つて居て、私の脚を突きました。庭には眞黑な怪物が寢て居て、大きな棍棒で私を毆りました。其の上屋根の上には裁判官が居て、惡者を引いて來うよう！」と言ひましたから、私は一生懸命に逃げて來たのです」

それから後盜賊等は二度と再び自分達の家へは寄付かなかつたが、あの四人のブレメンの音樂師は、其後愈々繁昌していつまでも此處を立退きません。

而して私の聞いた所では、今でもまだ彼處に居るといふ話でした。

れでないと餓死をしてしまふ、お前のやうな小つぽけな者は何處へも行けやしない、



猫と鼠が仲好になつたので、猫は鼠に向つて出任せに自分が鼠を可哀がつてゐるやうなことを言ひ、とう〳〵鼠を口車へ乗せて一緒に家を持つことに同意させてしまひました。

で、猫が言ふには―

―

「我々は冬の用意をしなけりやならない、そ

行けば屹度災難に出逢ふよ」

其處で二匹が相談して、脂の入つた壺を一つ持つて來ました。さて持つては來たものゝ何處へ藏つて置いたら安全かといふことが問題になつた。けれども永いこと思案した後に、猫が言つた。

「私の考へではどうも教會堂よりも適當な所はないやうだ、教會堂ならば誰も盜むことはないから。風琴の下へ藏つて置いて、本當に要る時までは手をつけないことにしようぢやないか」

其處で壺は安全に教會堂へ藏ひ込まれました。けれども少し經つと猫はそれが食べたくなつた。

「お前に一寸話すことがあるが」と猫が言つた、「實は私の小母さんが白毛へ茶の斑の入つた赤坊を生んで、私に名親になれと言ふもんだから、私は今から洗禮に行つて來なくつちやならない。今日は私をやつてお呉れ、而してお前は家に居て留守番をしてお呉れな」

「エヽ、行つてらつしやい」と鼠は答へた。「而して若し何か御馳走でもあつたら、私

にも持つて來て下さい、私もあの眞赤な、風味のいゝ、洗禮の葡萄酒を少し飲んで見たいものだ」

けれどもそれはみんな作事でした。猫には小母さんなんぞはありはしない、だから名親になつて呉れなんて言はれたことはないのです。

猫は眞直に教會堂へ入つて、脂壺を藏つた所へ行き、脂の頭が平になるまで舐めました。それから方々の家根の上を歩きながら、折々脂壺のことを考へ出しては日向で體を伸ばしたり、髭を撫でたりしてゐました。夕方になつて家へ歸ると、鼠は待兼ねて、

「お歸んなさい、どんなにか面白いことでしたらう！、」

「エ、、誠に結構な日でした」と猫が答へる。

「小猫には何といふ名をつけましたの」と鼠が聞く。

「頭均し！」と猫が口早に言つた。

「頭均し！」と鼠は變な顔をして「ヘエ、奇妙な、珍らしい名ですね、貴方の仲間ではそれが普通なのですか！」

「何うでもいゝぢやないか？」と猫が言ふ。「君達の方で（麵麭屑曳き）」なんて名をつけるやうなものさ」

それから又二三日經つと、猫は又しても脂が舐めたくなつて、鼠に向つて言つた。

「またお前に留守番をして貰ふやうなことが出來たよ、私はもう一度名親に頼まれた、而して赤坊の頸の周圍に白い圈があるもんだから、どうしてもことはる譯に行かないんだよ」

然う言はれて人の好い小鼠は、留守番を承知したので、猫は壁の後を傳はつて教會堂へ行き、壺の中の脂を又半分程平げてしまつた。

「自分の物を自分で食べる程甘いことはない」と猫は獨語を言つて、得意になつて居た。家へ歸ると鼠が又小猫の名を尋ねます。

「半缺け」と猫が答へた。

「半缺け！　それは何のことです？　私は生れてからまだそんな名を聞いたことがない、暦にだつて確かに載つてゐやあしない」

二三日すると猫は又御馳走のことを思ひ出して、食べたくてたまらなくなつた。

「善い事は三遍あるといふが」と鼠に向つて言ひ出した。「私は又名親に頼まれたよ、今度の子は眞黒なの、爪の尖が鳥渡白いばかりで、白い毛は體中に一本もない、こんなことは滅多にあることではない、本當に珍らしいのだから、今度ぎりやつてお呉れ」

「頭均し！　半缺け！」と鼠は首を傾げて、「どうも變手古な名だよ、何だか少し怪訝いね」

「オイ！　お前はいつも其の灰色の着物と長い尾の中で、無益いことばかり考へてゐる。それは世間を見ないせゐだよ」

と猫は言つて、出掛けて行きました。

猫が留守の間鼠は一生懸命に家の中を片付けて居たが、其の間に慾張りの猫は脂の壺をきれいに舐めてしまひました。

「無くなつてしまへば却つて諦めがつくもんだ」と猫はひとりで考へた。而して日が暮ると、腹を膨らまして、疲勞して家へ歸りました。

けれども鼠が又三番目の小猫の名を聞かせて呉れと言ひます。

「どうせお前の氣に入るやうなのぢやないよ」

と猫が答へる。「種無しと言ふのさ」

「種無し！」と鼠は驚いたやうな聲を出した。「成程變手古な名ですね。私はまだ何の本でも讀んだことがない。種無し！　とは何のことだらう？」

而して鼠は頭を振りながら、丸くなつて、寢てしまつた。

其の後猫はもう誰からも名親を頼まれなかつた。けれども冬が來て、もう戸外へ出て餌を引いて來られなくなると、鼠は貯へて置いた食物のことを思ひ出しました。

「あア、猫さん」と鼠が言つた。「あの藏つてある脂壺を出しませう、マアどんなにか甘くなつてるだらう」

「然うさね」と猫が言つた。「窓に向つて舌打ちをするやうに甘いだらうよ」

其處で連立つて家を出て教會堂へ行つて見ると、壺は元の所にありましたが、中は空虛です！

「ア、、分つた」と鼠が言つた。「お前は本當に正直な人だ。名親に頼まれた度毎にみんな食べてしまつたんだね、初は「頭均し」。次には「半缺け」。其の次には——

「默らないか？」と猫が荒々しく言つた「默らないと食つちまふぞ」

併し可哀想な鼠が「種無し」と言ひかけて、まだ言はない中に、猫はもう跳びかかつて一口に食べてしまひました。

これは毎日世の中に起ることです。

むかし〳〵一人の仕立屋があつて、三人の息子と一匹の山羊を持つて居りました。而して此の一匹きりの山羊の乳を家中で飲むのですから、どうしても山羊には充分草を食はせなくてはなりません。其處で毎日牧場へ連れて行くのですが、それは三人の息子が交替にすることになつてゐました。

或る日一番上の息子が山羊を連出して、寺の境内の、立派な牧草の生えた場所へ行つて、草を食はせて、自由に跳廻らせて置きました。夕方家へ歸る時刻が來ると、息子は斯う言つて聞きました——

「オイ、山羊公、もう充分か？」

すると山羊が答へました——

「充分ですとも、
此の上もう
入れる所はありません——バア！バア！」

「そんなら歸らう」と若者が言つた。而して手綱を結んで、山羊を小舍へ引いて來て

しつかり縛つて置きました。

「コレ」と年寄つた仕立屋が言つた。「山羊はよく食つたかへ？」

「エヽ」と息子が答へた。「入れる所がない位充分食ひました」

けれども親爺は自分で見なければ氣が濟まないので、小舍へ行つて、山羊を撫でて斯う言ひました——

「山羊公や、充分食つたかへ？」

すると山羊は答へました——

「何の充分だらう？
墓の中をいくら跳廻つたつて、
食べる物は何もありやせん——バア！バア！」

「何だつて？」と仕立屋が驚いたやうに言つて、跳んで行つて息子に怒鳴りつけました——

「此の嘘言者が！　山羊に何も食はせないで置いて、腹一杯食つたとは何だ！」

然う言つて腹立紛れに側にあつた物差で散々息子を打擲つて、とう〳〵家から逐出し

てしまひました。

翌日二番目の息子の番が來ました。此の息子は畑の土手に善い草の生へた所を見つけて、山羊にそれを食はせて置きました。

夕方山羊を連れて歸る時に、息子は斯う言ひました——。

「オイ、山羊公、もう充分か？」

すると山羊が答へました——

「充分ですとも、

此の上もう

入れる所はありません——バア！バア！」

「そんなら歸らう」と若者が言つた。而して山羊を小舍へ逐込んで、しつかりと縛つて置きました。

「コレ」と年寄つた仕立屋が言つた。「山羊はよく食つたかへ？」

「エヽ」と息子が答へた。「もう入れる所がない位充分食ひました」

けれども仕立屋はそれでは安心がならないので、小舍へ行つて、山羊に言ひました。

「山羊公や、本當に充分食つたかへ？」

すると山羊は答へました——

「何の充分だらう？

土手の上へ登つたつて、

食べる物は何もありやせん——バア！バア！」

「碌でなし野郎が」と仕立屋が怒鳴つた。「大切な家畜に何も食はせないなんて！」

然う言つて家へ駈込むと、物差を取つて、息子を叩出してしまひました。

其の次には三番目の息子の番になりました。此の息子は間違の無いやうにと考へて軟かな葉の茂つた一つの藪を見つけて、山羊に其の葉を食べさせました。

夕方山羊を連れて歸る時に、息子は斯う言ひました——

「オイ、山羊公、もう充分か？」

すると山羊が答へました——

「充分ですとも、

此の上もう

入れる所はありません――バア！バア！」
「そんなら歸らう」と若者が言つた。而して山羊を小舍へ入れて、しつかりと縛つて置きました。
「コレ」と年寄つた仕立屋が言つた。「山羊はよく食つたかへ？」
「エヽ」と息子が答へた。「もう入れる所がない位充分食ひました」
けれども仕立屋は息子の言葉に信用が置けないで、山羊の所へ行つて言ひました――
「山羊公や、本當に充分食つたかへ？」
すると性惡の獸が答へました――
「何の充分だらう？
籔の中を歩いたつて、
食べる物は何もありやせん――バア！バア！」
「あの畜生め！」と仕立屋が怒鳴つた。「何奴も此奴も碌でなしの恩知らずだ。あんな奴等にはもう用は無い」

然う言つて家へ跳込むと、腹立紛れに物差を振廻して、息子の背中を擲りつけて、とう〳〵家から逐出してしまひました。
其處で年寄つた仕立屋は山羊と二人ぎりになりました。翌日仕立屋は自分で小舍へ行つて、山羊を曳出して、斯う言ひました――
「さア、山羊公や、今日は俺が牧場へ連れてつてやるぞ」
然う言つて手綱を取つて、山羊を草の澤山ある青々した野原へ連れて行つて、放しました。而して
「さア、今度こそは腹一杯食べるがいゝ」
と言つて、其處へ置いて行きました。
夕方になると仕立屋が來て言ひました――
「コレ、山羊公や、充分食べたかへ？」
すると山羊は答へました。
「充分ですとも、
此の上もう

入れる所はありません――バア！バア！」
「そんなら歸らう」と仕立屋が言つた。而して山羊を小舍へ曳込んで、しつかりと縛りつけました。
山羊を置いて行く前に、仕立屋は振返つて、もう一度聞きました――
「それでは、今度こそは充分だらうな」
けれども山羊は確かに斯う答へました――
「何の充分だらう？
野原を捜し廻つたつて、
食べる物は何もありやせん――バア！バア！」
これを聞くと仕立屋は吃驚仰天してしまひました。而して直ぐに三人の息子を逐出したのは、とんだ大間違であつたと分りました。
「待てよ、此の恩知らずの畜生め！」と仕立屋が言つた。「貴樣を逐出しただけぢやア面白くない、二度と再び立派な仕立屋の中へ顏が出せないやうにしてやる」
然う言ひながら大急ぎで、剃刀を取つて來て、山羊の頭をクル〳〵とまるで掌のやう

に滑く剃つてしまひました。而して物差ではあんまり勿體ないといふので、鞭を持つて來て、力一杯に打擲きましたから、山羊は跳上つて逃て行つてしまひました。
老人は家へ入ると急に心細くなつて、三人の息子が歸つて來て呉れゝばいゝと思ひました。けれども息子達の行方は、誰も知りませんでした。
一番上の息子は家を逐出されてから、指物師の弟子になつて、仕事に精を出しましたが、やがて年期が濟んで、親方の家を出る時に、指物師は一つの卓子を呉れました。此の卓子を見た所では別に變つた所もなく、普通の木で拵へたものでしたが、たゞ一つ素的な性質を持つて居ました。誰でも此の卓子を其處へ置いて、
「卓子、支度をせい！」
と言ふと、結構な卓子は見る間に清潔な布が掛かり、小皿や小刀や肉叉や煮たり燒いたりした料理を盛つた皿や、人の心をそそるやうな眞赤な色をした葡萄酒の杯が並べられるのです。
若者は此の卓子を貰つたので、これさへあればもう一生不自由はないと思つて、大喜びで旅へ出掛けました。而して宿屋の善惡や、食ふ物の有無は、少しも心配になり

ませんでした。腹が減つて來ると、原だらうが、林だらうが、牧場だらうが、何處でもかまはず卓子を地面へ置いて、

「卓子、支度をせい！」

と、いつでも望通りの食事が眼の前へ並びました。

最後に息子は又親父の所へ歸りたくなりました。親父の立腹ももう薄らいだ時分だし、それに此の不思議の卓子を持つて歸つたら屹度御機嫌が好いだらうと思つて家の方へ足を向けました。其の途中で、或る晩一軒の宿屋へ着くと、もう先客が一杯ありましたが、其の人達は此の若者を快く迎へて、一緒に食事をしろと言ひました、それでなければ何も食べる物が無いだらうからと言ふのです。

「否」と若い指物師が答へた。「皆様に御心配をかけては濟みません。それよりも私が皆様に御馳走しませう」

すると一同は笑つて、笑戯だと思ひましたが、若者は小さな木の卓子を持つて來て、部屋の中央へ据えて、

「卓子、支度をせい！」

と言ひました。すると瞬く中に宿屋の主人が出した食事よりも上等な御馳走が其處へ並んで、旨さうな香氣がプン／＼と客人の鼻を打ちました。

「皆様、如何です」と指物師が言つた。而して人々は此の有様を見て、二度と言はれるのを待たず、小刀を取りあげて、せつせと食事を初めました。而して尚ほ驚いたことは、一つの皿が空になると、直ぐに一杯入つた他の皿と交替はることでした。

其の間宿屋の亭主は、隅の方へ立つて、殘らず見て居ましたが、あんまり吃驚してしまつて口が利けませんでした。それでも心の中では斯う考へました——

「こんな料理人は家なんぞには調法だ」

指物師と客人達とは夜が更けるまで愉快に食事をして居ましたが、やがてみんな寢床へ入りました。而して指物師も望みの卓子を壁側へ片付けて置いて寢間へ行きました。けれども亭主は卓子のことが氣になつて眠れないで居ましたが、ふと物置の中に同じやうな古卓子があつたのを思出して、それを持つて來て指物師の卓子と摩替へて置きました。翌朝指物師は勘定を拂つて、僞物とは夢にも知らずに、卓子を擔いで、宿を出ました。午頃家へ着くと、親父は大喜びで迎へました。

「コレ、怪や」と老人が言つた。「お前は何を覺えて來たへ？」
「お父さん、私は指物師になりました」と息子が答へた。
「それはいゝ職業だ」と老人が言つた。「だがお前は何か旅の土産を持つて來たかね？」
「お父さん、善い物を持つて來ました、此の卓子です」と息子が言つた。
仕立屋は卓子をグル〳〵見廻して、言ひました。
「お前はあんまり腕が好ささうでもないな、これは古い、ガラクタ物だ」
「ですがそれが本當に不思議な卓子なんです」と息子が答へて「私が此れを据えて、支度をせいと言ふと、直ぐに立派な料理と心をそゝるやうな上等な酒が此の上へ並ぶのです、一つ友人や近所の人達を殘らず招待して、御馳走をしてやりませう、此の卓子がいくらでも支度をして呉れますから」
やがてお客がみんな集まつた所で、若者は卓子を部屋の中央へ据えて、
「卓子、支度をせい！」
と言ひました。
けれども卓子は動きません、而して人の言葉の解らない他の卓子と同じやうにいつ

までも空虛で居ました。可愛想な指物師は卓子が支度されないでゐるのを見て、自分がまるで馬鹿者のやうに見えるのを羞しく思ひました。人々は遠慮なく若者を笑つて飲まず食はずで家へ歸つて行きました。
其處で親父はまた布を取集めて仕事にかゝりました。而して息子は別な親方の所へ職人に入ることになりました。
二番目の息子は水車屋に奉公しました。而して年が明けた時に主人が斯う言ひました——
「お前はよく勤めて呉れたから、珍らしい驢馬をお前にやらう。車も曳かなければ、袋も運ばない——」
「それでは何ういふ取柄があるのです？」と若い番頭が尋ねた、
「黄金を吐出すのだ」と水車屋が答へた。「此の驢馬の前へ布を敷いて『ブリックルブリット』と言ふと、金貨が出て來るのだ」
「それは素的な代物だ」と番頭が言つた。而して主人にお禮を言つて、旅に出掛けました、金の欲しい時にはたゞ此の驢馬に向つて、「ブリックルブリット」と言ひさへ

すれば、金貨の雨が降つて來るので。旅をするに少しも心配がありませんでした。財布はいつも充滿になつて居たから、行く先々で一番贅澤な生活をして、金はいくらかかつても構はなかつた。

長いこと世間を見て歩いた後、若者は親父の所へ歸つて見たくなりました。親父ももう立腹を忘れて居るだらう、それにこの黄金の驢馬を持つて行つたら、尙喜で迎へるだらうと若者は思ひました。而して偶然にも此の息子が又兄貴の卓子が麼替へられたあの宿屋へ泊ることになりました。若者は手づから驢馬を曳いて行きました、すると宿屋の亭主が驢馬を受取つて繋がうとしましたが、若者は斯う言ひました——

「爺さん、それには及ばない、私が自分で厩へ曳いて行つて繋いで來るから、其の方が居る所が分つてゐていゝのだ」

亭主は妙なお客だと思ひました。而して自分で驢馬の世話をするやうな人が大したお金を使はうとは思ひませんでした。けれども、其のお客が衣嚢へ手を突込んで金貨を二枚出して、何か旨い物を食はして呉れと言つた時には亭主は眼を圓くしました。而して大急ぎで駈けて行つて、一番上等な料理を持つて來ました。

食事が濟むとお客は勘定書を持つて來いと言ひました。すると亭主は取れるだけは取らうと思つて、金貨をもう二枚請求しました。番頭は衣嚢へ手を入れて見たが、もう金貨はおしまひになつて居たので、

「主人一寸待つて呉れ」と番頭が言つた。「今行つて金を持つて來るから」

然う言つて卓子掛を持つて、部屋を出て行きました。宿屋の亭主には何をするのか分らなかつたが、それでも客人の爲ることを知りたいといふ心から、潛と後をつけて行つて、客人が厩の扉を閉め切つてしまふと、鍵穴から覗いて居ました。其の時客人は其の巾を驢馬の前へ擴げて、「ブリックルブリット」と言ふと、直ぐに金貨が驢馬の口から出て、雨のやうに地の上へ落ちました。

「ア、」と亭主が言つた。「これは金を儲けるには早道だ、こんな財布を持つてちやア惡くないな」

それから客人は勘定を拂つて寢床へ入りました。けれども亭主は夜半頃に潛と厩へ忍んで行つて、黄金の驢馬を曳出して、其の代りに他の驢馬を繋いで置きました。

翌朝早く番頭は僞物とは夢にも思はないで、驢馬を曳いて宿を立ちました。午頃家

へ着くと、親父は息子の顔を見るのが嬉しくつて、大喜びで迎へました。
「倅や、お前は何職業を初めたへ？」と親父が聞いた。
「お父さん、私は水車屋です」と息子が答へた。
「旅の土産には何を持つて來たへ？」と親父が又尋ねた。
「驢馬だけです」と息子が答へた。
「驢馬ならば爰には澤山ある」と親父が言つた。「好い山羊でも持つて來る方がよかつたに！」
「エ、」と息子が答へた。「ですがこれは普通の驢馬ではありません。私が『ブリックルブリット』と言へば、此の獸は金貨を一包吐出すのです、一つ近所中の者を殘らず招待しませう。私はみんなを金持にしてやります」
「それは結構だ！」と仕立屋が言つた。それでは俺はもう針を使はなくも濟む譯だ」然う言つて仕立屋は自分で跳出して行つて、近所の人達を集めました。
みんなが集まつたのを見て、水車屋は少し場所を空けて呉れるやうにと言つて、驢馬を曳込み、其の前へ巾を擴げました。

「さア、見ておいでなさい」と若者が言つた。而して「ブリックルブリット！」と聲を掛けましたが、金貨なんぞは一つも出はしません、矢張り普通の驢馬と違つた所はありませんでした。
憐れな水車屋は初めて摩替へられたことが分つたので、泣きさうな顏をして、近所の人達に詫を言ひました。近所の人々は金持になり損つて、前の通りの貧乏人で歸つて行きました。
其處で老人はまた針を持たなくてはならぬことになり、若者は水車屋へ奉公することになりました。
三番目の息子は刻物師の弟子に入りました。けれども刻物細工は大層面倒な仕事ですから習ふのに暇がかゝりました。其の間に二人の兄から手紙が來て、揃ひも揃つて酷い目にあつたことや、一番終に泊つた宿屋の亭主に寶物を盜まれてしまつたことなぞを言つてよこしました。若い刻物師は仕事を覺え込んで、旅に出るといふ時に、親方はよく勤めた褒美として一つの袋を若者にやつて、此の中には一本の棒が入つてゐると言ひました。

「此の袋を肩へ掛けて行けば至極調法になります」と若者が言つた。「けれども棒は何の役に立つのですか？」

「それは今話すよ」と親方が答へた。「若し誰かお前に仇をする者があつたら、

『棒、袋から出い！』

と言つて見なさい、すると棒は其の奴等の上へ跳り蒐つて、一週間位は動くことも、出來ない位にやつゝけてしまふから、而してお前が

『棒、袋へ入れ！』

と言ふまでは決して已めない」

弟子は親方に禮を言つて、其の袋を持つて旅に出ました。而して仇をする者がある度毎に、

「棒、袋から出い！」

と言ふと、直ぐに棒が跳出して、上衣の上だらうが、胴衣の上だらうが、所嫌はず打ちのめして、譯もなくやつつけてしまふのです。

或る晩若い刻物師は二人の兄が瞞された宿屋へ着きました。若者は卓子の上へ袋を

置いて、自分が旅行中に見た色々な不思議な物の話を初めました。

「エ、」と若者が言つた。「貴方は自分で支度をする卓子や、黄金を吐出す驢馬なんぞのことをお言ひですが、それは全く結構なものには違ひないが、私が此の袋の中へ入れて持つて居る寶に比べたら、何でもありはしません」

宿屋の亭主は耳を引立てゝ居ました。

「ハテ、何だらう？」と亭主が思つた。「あの袋には貴い寶石でも詰まつて居るに違ひない、どうせ俺の物になるのだ、二度あることは三度といふから」

寢る時間が來ると客人は長椅子の上へ横になつて、枕の代りに袋を頭の下へ置きました。亭主は、若者がもう熟睡んだらうと思はれる時分に、忍んで來て、若者の上へ屆んで、徐々と袋を引張りました。其の袋を引拔いて、他の物と摩替へて置かうといふつもりなのです。刻物師はそれを待構へて居た所ですから、亭主が最後にグッと強く引張つた拍子に、

「棒、袋から出い！」

と言ひました。すると忽ち棒が跳出して、亭主の背中を一生懸命に打擲りました。

宿屋の亭主は泣聲を出して謝つたが何にもなりませんでした。亭主が大きな聲を出せば出す程、いよ〳〵強く棒が背中へ當りましたので、亭主はとう〳〵へト〳〵になつて地面へ倒れてしまひました。

それを見て刳物師は斯う言ひました——

「卓子と驢馬を素直に渡さなければ、今の藝當をもう一度やるぞ」

「ア、、いけません！」とすつかりへコタレてしまつて亭主が言つた。「私はもう何もかもお返し申しますから、何卒此の恐ろしい怪物を袋の中へ戻して下さい」

それを聞いて若者は言ひました——

「今度だけは特別に赦してやるが、此の後は注意するんだぞ！」

其處で若者は、

「棒、袋へ入れ！」

と言つて、亭主を安心させてやりました。

翌朝刳物師は卓子と驢馬を持つて、お父さんの居る家の方へ出立しました。仕立屋は息子の顔を見ると大喜びで、先づ何を外で習つて來たかと聞きました。

「ブリツクルクツリブ！トツリブルクツリブ！」

「お父さん」と息子が答へた「私は刻物師になりました」
「それは大層面倒な仕事だ」と親父が言つた。「それでお前は旅の土産には何を持つて來たへ？」
「お父さん、本當に珍らしい物です」と息子が答へた。「袋へ入つた棒です！」
「何？」と親父が言つた。「棒ならばそんな苦勞は要らない、樹を伐つて來ればいつでも出來るもの」
「ですが、お父さん、これは普通の棒ではありません」と若者が言つた。「私が、
『棒、袋から出い！』
と言へば棒は私に仇をしようといふ者の方へ跳出して、踊り廻るのです、而して其の奴が地面へ打倒されて、赦して呉れと言ふまではやめません。コレ、御覽なさい！
此の棒で私はあの手癖の惡い宿屋の亭主が、二人の兄さんから取つた卓子と驢馬を取返して來ましたから。さア、二人共呼びにやつて、序に近所中の人もみんな呼集めて腹一杯飲食させた上に、衣嚢へ黄金を一杯入れてやりませう」
年寄の仕立屋はそんな事を本當にはしなかつたが、それでも二人の息子と近所中の

人を呼んで來ました。すると若い刹物師は驢馬を曳込んで、其の前へ布を擴げて、兄に言ひました——

「さア、兄さん、驢馬に言葉をお掛けなさい」

其處で水車屋が

「ブリックルブリット！」

と言ひました。と見る〳〵布は金貨で隱れてしまつて、みんなが持切れない程の分前を貰ひました。

（私は皆樣が其の場におゐでにならなかつたのを御氣の毒に思ふから、此のお話をしてあげるのです）

其の次に刹物師は卓子を其處へ据えて、言ひました——

「さア、兄さん、卓子に言葉をお掛けなさい」〵

すると指物師が、

「卓子、支度をせい！」

と言ひました。すると見る〳〵布が掛かつて、其の上へ立派な料理を盛た皿が澤山並

びました。

其處で此の仕立屋の家では前代未聞の宴會が開かれて、一同の人が一晩中愉快に、話して居りました。

仕立屋はもう針と糸と物差と鋏斗を戸棚の奥へ投込んでしまつて、其の後は三人の息子と一緒に、樂しい、幸福な日を送りました。

けれども仕立屋の息子達が逐出される原因になつた、あの山羊は全體何うしたでせう？　序に其の話もして置きませう。

あれから山羊は自分の坊主頭を恥しがつて、狐の穴へ駈込んで、隱れて居ました。狐が歸つて來ると、眞暗な所から二つの大きな眼玉が、自分の方を見詰めて居るので吃驚して、逃げて行きました。途中で熊に逢ふと、熊は狐の落着かない容子を見て、斯う尋ねました——

「狐さん、何うしたのです、そんな顏をして？」

「アヽ」と狐が答へた。「恐ろしい獸が私の穴の中に居て、火のやうな眼をして私を睨んでゐるんだよ」

露光量違いの為重複撮影

ルゲンリヨとデンリヨ

「早く其奴を逐出さうぢやないか」と熊が言つた。而して穴へ行つて、中を覗きましたが、火のやうな眼を見ると、同じやうに怖氣がついて、そのやうな恐ろしい獸にかかり合ふ氣が無くなつて、これも逃歸りました。途中で蜂に逢ふと、蜂は熊の悄然した容子を見て、斯う言ひました。

「熊さん、大層元氣のない顏容をして居ますね、いつもの元氣は何處へ置いて來たのですす？」

「何故」と熊が答へた。「狐の穴に恐ろしい獸が居て、火のやうな眼を光らしてゐるが私達には逐出せないのだよ」

すると蜂が答へました——

「熊さん、貴方はいつも私を輕蔑して居ますね、私は此の通り憐れな、弱い、小さな動物ですが、それでも貴方の加勢位は出來るつもりです」

然う言つて蜂は狐の穴へ飛んで行き、山羊のクル〳〵と剃つた頭へ棲つて、チクリと强く刺しましたので、山羊は驚いて跳上ると、「バア！バア！」と鳴き乍ら、氣が狂つたやうに駈け出して行きました。而して今度こそは誰も山羊の行方を知りませんでした。

露光量違いの為重複撮影

「早く其奴を逐出さうぢやないか」と熊が言つた。而して穴へ行つて、中を覗きましたが、火のやうな眼を見ると、同じやうに怖氣がついて、そのやうな恐ろしい獸にかかり合ふ氣が無くなつて、これも逃歸りました。途中で蜂に逢ふと、蜂は熊の悄然した容子を見て、斯う言ひました。

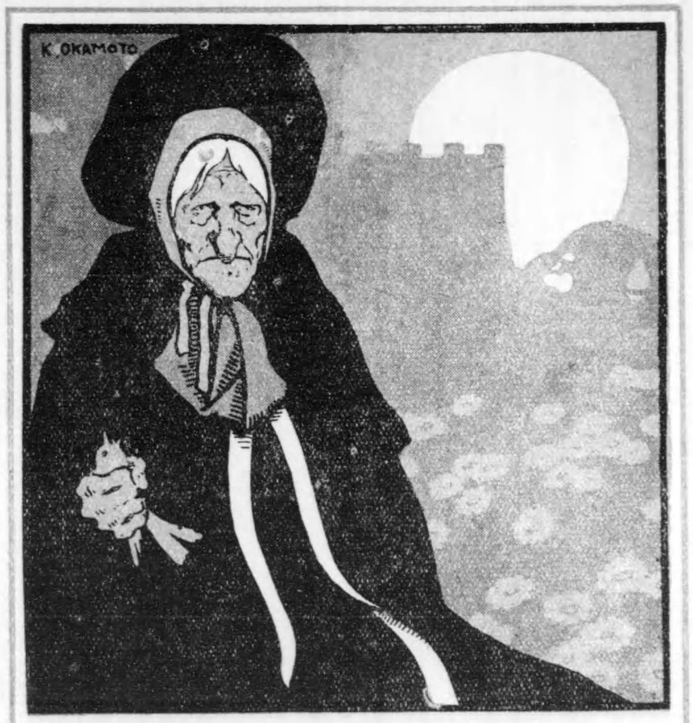
「熊さん、大層元氣のない顏容をして居ますね、いつもの元氣は何處へ置いて來たのですか？」

「何故」と熊が答へた。「狐の穴に恐ろしい獸が居て、火のやうな眼を光らしてゐるが私達には逐出せないのだよ」

すると蜂が答へました——

「熊さん、貴方はいつも私を輕蔑して居ますね、私は此の通り憐れな、弱い、小さな動物ですが、それでも貴方の加勢位は出來るつもりです」

然う言つて蜂は狐の穴へ飛んで行き、山羊のクル〳〵と剃つた頭へ棲つて、チクリと强く刺しましたので、山羊は驚いて跳上ると、「バア！バア！」と鳴き乍ら、氣が狂つたやうに駈け出して行きました。而して今度こそは誰も山羊の行方を知りませんでした。



ルゲンリヨとデンリヨ

むかし〳〵或る奥深い森の中に一つの城があつて、其處には年寄つた魔女がたつた一人で住まつて居りました。此の魔女は日中は猫や梟に姿を變へて居るが、夜になると本當の姿に復るのです。此の老女は野獸でも鳥でも好きに自分の方へ誘き寄せる術を知つてゐて、それを殺しては、料理して食べて居ます。此の城から百歩以内の所へ入つた者は、誰でも其處へ立つたぎりになつて、魔法が解けるまでは一歩も動くことは出來ません。けれども若しそれが奇麗な娘であれば、老女はそれを鳥にして籠へ入れて、城の中の一つの部屋へ持つて行くのです。此の部屋には然ういふ珍らしい鳥を入れた籠が、今迄にもう何千といふ程たまつて居ります。

さて爰にヨリンデと呼ぶ若い娘がありました。ヨリンデは大變に奇麗な娘で、ヨリンゲルといふ若者と許嫁になつて居る。而して今話さうとする事が起つた時には、此の二人はいつも一緒になつては樂しい日を送つて居ました。

或る日二人は森の中へ入つて行きました。其の時ヨリンゲルはヨリンデの方を見て

斯う言ひました——

「あんまりあの城の近くへ行かないやうに氣をおつけよ」

それでも二人はだん〳〵奥の方へ進んで行きました。折しもよく晴れた美くしい夕方で、太陽は木の幹の間から、深綠の葉の上へギラ〳〵した光を浴せ、斑鳩は山櫨の藪の上でクウ〳〵と優しく鳴いて居た。

其の中にヨリンデは突然泣聲を出して、ギラ〳〵する日光の中へ坐つてしまひました。ヨリンゲルも同じやうに坐つて泣きました。それは二人が不圖氣がついて身邊を見廻した時、あんまり深入して、家一軒目に入らない所まで來てしまつたことが分つたので、急に恐ろしくなつて、死にさうな心持がしたからです。

太陽はまだ半分沈んだばかりで、半分は山の上に顔を出して居ました。而してヨリンゲルが藪を透して見ると、城の古壁が直ぐ眼の前に立つてゐたので、尙のこと震へ上つて、後へ引返さうと思ひました。其の時ヨリンデは斯う歌ひ出した——

「眞紅な圏のある私の鳥が
悲しい、悲しい歌を歌ふ、

斑鳩が直き死ぬだらうと歌つてゐる、

オヽ、悲し、オヽ、悲し――ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ！」

ヨリンゲルが頭を上げて見ると、ヨリンデはもう、鶯の姿に變つて、「ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ」と鳴いて居ました、すると何處からか一羽の梟が來て頭の上を三度廻つて、眼玉を光らせながら、「ホロ、スケ、ホー、ホー」と鳴きました。ヨリンゲルは身動きも出來ずに、石のやうに突立つて居た。泣くことも、口を利くことも、手足を動かすことも出來なかつた。

其の中に日が入つて、梟が藪の中へ飛込んだと思ふ間もなく、一人の老女が出て來ました。痩せた、黄い顔で、大きな赤い眼と、頤まで垂れ下つた鉤鼻を持つてゐます。老女は口の中で何かブツ〳〵言ひながら、鶯を捕へて、手で握つて行つてしまふ、其の間もヨリンゲルは動くことも、口を利くことも出來ずに、其處にジッとして居ました。

終に魔女が又歸つて來て、響のない聲で斯う言つた――

「コレ〳〵ザキエル！　若し月がお前の側で光つたら、此の人を直ぐ放してやれ」

――（眞紅な圓のある私の鳥が悲しい悲しい歌を歌ふ）――

するとヨリンゲルはまた動けるやうになりました。其處で、魔女の前へ膝を突いて、何卒ヨリンデを返して下さいと賴みましたが、魔女はそんなことは出來ない、ヨリンデはもう決してお前の手へは返さないと言つて、行つてしまひました。

ヨリンゲルは魔女の後から聲を立てゝ泣いたり賴んだりしましたが、何の役にも立たなかつたので、終に泣く〳〵立上つて、知らない村へ出て、其處で羊の番人になりました。

其の間ヨリンゲルは暇さへあれば此の城の周圍を廻つて歩きましたが、それでもあんまり近くへは寄りつきませんでした。或る日矢張り然ういふ風に城を廻つて歸つて來ましたが、其の夜の夢に、血のやうに紅い花で、其の眞中に美くしい眞珠の光つて居るのを見つけて、それを折つて城へ行くと、其の花の觸つた物はみんな魔術が解けてとう〳〵ヨリンデを取返したと思つたら眼が覺めました。

其の翌朝からヨリンゲルは山や谷を越えて夢に見た花を搜して歩きました。それから九日經つて十日目の朝早くとう〳〵それを發見けました。其の眞中には美くしい眞珠のやうな大きな露の玉がありました。

ヨリンゲルは其の花を持つて晝も夜も休まずに城の方へ進んで來ました。魔術で封じられた所から中へ踏込んでも、今度は何のこともなく、平氣で城の門まで來られました。ヨリンゲルは大變な意氣込で、手に持つた花を門へ觸れると、門は見る間にパッと兩方へ開いた。其處から入つて、小鳥の聲を尋ねながら、ズン〳〵と奥の方へ進んで行くと、一つの部屋の中で小鳥の聲が聞えますから、突と入つて行くと、中では魔女が七千籠の鳥に餌をやつて居て、ヨリンゲルを見ると恐ろしく怒つて、口から毒を吐いて、ヨリンゲルを惱ましたが、それでもあんまり側までは寄つて來ない。ヨリンゲルはそれには驚かないで、立つたまゝ鳥籠をズラリと見廻したが、悲しいことに同じやうな鶯の籠が澤山あつて、どれがヨリンデか見分けがつきません。

ヨリンゲルがあれかこれかと籠の檢査をして居ると、魔女が一つの籠を提げてコソ〳〵と部屋を出て行くのに氣がつきましたから、急いで其の後を逐つて、手に持つた花で鳥籠へ觸り、又魔女の體へも觸りました。すると老女の魔力が忽ち消えて、ヨリンデは直ぐにまたもう、龍のやうな美くしい姿になつて、ヨリンゲルの頸へ縋りました。

それからヨリンゲルは他の鳥も残らず魔術を解いて放してやつて、ヨリンデと一緒に家へ歸り、末永く幸福な、滿足な月日を送りました。

牝鶏の死

ある時牡鶏と牝鶏が、胡桃林へ行きましたが、若し胡桃が見つかつたら、孰方が先に見つけても、二人で分けようといふ約束をしました。其の内に牝鶏が一つの大きな胡桃を見つけましたが、あんまり立派な核でしたから、牝鶏は牡鶏に隠して自分ひとりで食べようと思ひました。

けれどもそれは牝鶏の咽を通らない位大きな胡桃だつたものですから、飲む拍子に咽へ閊へて、今にも息が詰まりさうになりました。

其處で牝鶏は牡鶏を呼んで言ひました。——

「後生ですから、駈出して行つて、水を持つて來て下さい、早くしないと息が詰まります」

牡鶏は大急ぎで小川へ駈けつけて、言ひました。

「小川さん、水を少し下さい、牝鶏が今あすこで大きな胡桃を咽へ痞へさせ、息が詰まりさうなんです」

「先づお嫁さんの所へ行つて紅絹の布を貰つといで」

と小川が答へた。

牡鶏はお嫁さんの所へ駈けつけて言ひました。

「お嫁さん、何卒、紅絹を少し下さい、小川が紅絹を持つて來いと言ひます、私は小川に水を貰ふ約束なのです、牝鶏が今あすこで大きな胡桃を咽へ痞へさせて、息が詰まりさうなんですから」

けれどもお嫁さんは答へた——

「先づ行つて、柳の木に掛かつてゐる、私の花束を取つておいで」

其處で牡鶏は柳の木へ駈けて行つて、枝から花束を取つて、お嫁さんの所へ持つて行くとお嫁さんが紅絹の布を呉れた。其の紅絹を小川へ持つて行くと、小川が水を呉れた。其の水を牝鶏の所へ持つて行つたが、可哀想に、もう間に合はなかつた、牝鶏は息が詰まつて冷たくなつて寢てゐました。

牡鶏はそれを見ると大變に嘆いて大きな聲を立てゝ泣きましたから、獣類がみんな集まつて來て、牝鶏の死を弔ひました。而して六匹の鼬鼠が牝鶏を墓まで載せて行

く小さな馬車を造りました。馬車が出來上ると鼷鼠は自分でそれを曳き、牡鶏が御者になつて出掛けました。

途中で狐に逢ひました。

「ヤア、牡鶏さん」と狐が言つた。「何處へ行きなさる！」

「牡鶏の葬式です」と牡鶏が答へた。

「私も行つていいでせうか？」と狐が尋ねる。

「宜しい」と牡鶏がいつた。「馬車の後から來て下さるなら」

狐は後へ廻つて、ついて行つた。それから狼や、熊や、山羊や、獅子や、其の他森の獸類が、みんな其の通りにした。

少し行くと一つの河がありました。

「さて、何うして渡つたものでせう？」と牡鶏が言つた。すると河の中に一本の藁がありましたが、

「私が橋になつてあげるから」と藁が言つた。「貴君方は私の上を渡つたらいゝでせう」

けれども六匹の鼷鼠が橋へかゝると、橋が折れて、六匹共水の中へ落ちて、死んでしまひました。

其處でまた困つてゐると石炭が來て言ひました。

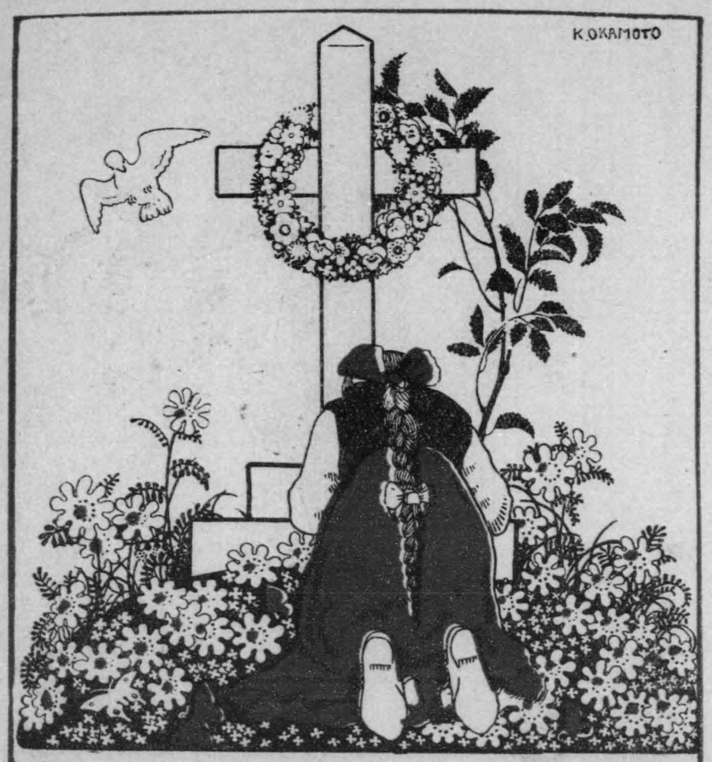
「私が橋にならう、皆様は私の上を渡つておいでなさい」

然う言つて石炭は水の中へ寢轉んだが、運惡くあんまり深く漬つたので、火が消えて、死んでしまひました。

すると石が氣の毒がつて、牡鶏を助けるつもりで、水の中へ寢て呉れたので、牡鶏は牡鶏の死骸を載せた車を曳いて、無事に向岸へ上りました。それから後へついて來た他の者も車で渡さうと思つたが、あんまり重過ぎたので、車が途中で轉覆へつて、みんな水の中へ落ちて、ブク〳〵と沈んでしまひました。

其處で可哀想な牡鶏は、牡鶏の死骸を持つて獨りぎり殘されたので、墓を堀つて、牡鶏を埋め、土を盛上げて、其の上へ坐つて、いつまでも〳〵泣いて居ましたが、と

う〳〵死んでしまひました。然ういふ風にして此の仲間は一人殘らず死んでしまつたのです。



消炭さん

毎日毎日娘はお母さんのお墓へ行つては、泣いてゐました。而してお母さんの遺言

むかし或る金持の細君が大病になつて、もう死ぬといふ時に、一人ぎりの娘を枕元へ呼んで斯う言ひました——

「お前は何でも正直に、溫順くするんですよ、然うすれば神様はいつでも護つて下さるし、私も天で見てゐて、始終お前のことに氣をつけてゐますからね」

然う言ふと母親は眼を瞑つて、死んでしまひました。

通り正直に、溫順くしてゐたが、其の中に冬が來て、お墓を眞白な雪で包んでしまふ。それから春になつて、太陽が此の白い被衣を持つて行つた時に、お父さんは新しい細君を迎へました。

新しい細君は娘を二人連れて來ました。二人共顏は白く綺麗でしたが、心は黑く、拗くれてゐました。其の時から此の薄命な繼子の身の上に慘めな日が來たのです。

「あの鶯を私達と同じ部屋に置くんですか？」と二人の娘が言ふ。「麵包を食べるんなら、食べるだけの働きはしなけりやならないわね。下女を座敷へ上げとくなんてことはないわ！」

然う言つて二人がかりで此の娘の立派な着物を剝ぎ取つて、古ぼけた鼠色の上衣を着せ、足には木の沓を穿かせて、「お姫樣のやうに威張つたつて、其の態ではもう駄目だわ！」と愚弄りながら、臺所へ連れて行きました。

それからといふものは、朝から晩まで間斷なしに逐廻されて、暗い中から水を汲みにやられたり、火を焚かされたり、洗濯物をさせられたりした上に、それでも足らずに、姉妹は有らゆる手段を盡くして、虐めたり、愚弄つたり、時には故意と豆を灰の

中へ打蒔けて、一つ〳〵拾はせたりします。夜になつて、身體が綿のやうに疲れても、寢床といふものはなく、竈の灰の中へ寢かされるので、いつも身體は灰塗れでした。

それでみんなが名は呼はずに、「消炭さん」と言ひました。

或る日のことお父さんが市へ行く用事が出來たので、二人の繼娘に向つてお土產は何がいいと尋ねると、一人は「美くしい着物を」、一人は「眞珠や寶石を」といふ答へです。

「では、消炭さん、お前は何が欲しい？」

とお父さんが言ふと、消炭さんは、

「お父さん、私には歸路で一番初めにお父さんの帽子の觸つた木の枝を折つて來て下さい」

と言ひました。

其處でお父さんは二人の繼娘には立派な着物と寶石を買ひ、又歸路に葉の繁つた林の中を馬で來る時に、帽子へ觸つた榛の枝を折つて歸り、繼娘には望みの品をやり、消炭さんには榛の枝をやりました。

消炭さんは大層喜んで直ぐとお母さんの墓へ跳んで行き、其の枝を墓の上へ植えて、永い間泣いてゐました。すると其の涙が土を濕して、榛の枝に根がつき、次第に成長して、美しい樹になりました。

消炭さんは一日に三度宛其の木の下へ行つては、泣いてお祈りをする、と、屹度白い小さな鳥が木の上を飛んでゐて、消炭さんが何か願事をすると、何でも願つた物を上から落して呉れました。

暫くすると國王から或るお布令が出ました。それは三日に亘つて國中の美しい娘を殘らず王宮へ呼集め、其の中から王子の花嫁を選ぶといふのです。二人の繼娘は自分達も、王宮へ行かれるといふことを聞いたので大層喜んで、消炭さんを呼んで、斯う言ひました——

「髮を梳しと呉れ、靴を磨いと呉れ、締金をしつかりしと呉れ、私達は王樣の夜會へ行くのだから」

消炭さんは自分も王宮へ行つて一緒に踊りたくつてたまらないので、泣きながら姉妹の支度を手傳つてゐましたが、そつと繼母に向つて自分もやつて貰ひ度いと願ひま

した。

「消炭さん、お前が！」と繼母は眼を丸くした。「お前さんはそんな塵埃だらけな身體をして——それで夜會へ行くつもりなのかへ？　お前さんは着る物も穿く物もなくつてどうして踊るつもりなの？」

それでも消炭さんがやつて下さい、やつて下さい、と言つてせがむので、繼母はしまひに斯ういふ難題をかけました。

「今豌豆を一桶灰の中へこぼすから、若しお前さんが二時間の内に元の通り拾ひ込んだら、行かせてあげませう」

すると娘は部屋を出て裏口から庭へ行き、

「鳩も鳥もみんな來てお手傳をしてお呉れ、善い豆は桶へ入れて、惡いのは食べてもいい」

と言ふと、直ぐに臺所の窓から、白い鳩が二羽來ます。其の後から色々な鴿や、樣々な鳥が囀りながら灰の上へ舞降つて、銘々に豆を拾ひ初めました。啄いて、啄いて、啄いて、一時間とは經たない中に、善い種子を一つ殘さず桶の中へ拾ひ込んで、一度

にパーッと飛んで行つてしまふ。

娘はこれで夜會に行けるのだと喜んで、繼母の前へ桶を持つて行くと繼母は、

「消炭さん、お前さんは着て行く着物も無いし、舞踏だつて出來やしない、笑はれに行くやうなものですよ」

と言つたが、消炭さんが泣き出すと、

「若しお前さんが二桶の豌豆を灰の中から一時間の内にきれいに拾つたら、一緒にやつてあげませう」

と言ひました、それでも腹の中では「今度はよもや出來はしまい」と思つてゐたのです。

二つの桶が灰の中へあけられたのを見て、消炭さんは又裏口から庭へ出て、前のやうに、「鳩も鳥もみんな來てお手傳をしてお呉れ、善い豆は桶へ入れて、惡いのは食べてもいゝ」

と言ふと、直ぐに臺所の窓から、白い鳩が二羽來ます。其の後から色々な鴿や、樣々な鳥が囀りながら灰の上へ舞降つて、銘々に豆を拾ひ初めました。啄いて、啄いて、啄いて、半時間とは經たない中に、一つ殘さず二つの桶へ拾ひ込んで、一度にパーッ

と飛んで行つてしまふ。

娘はこれで夜會に行けるのだと喜んで、繼母の前へ二つの桶を持つて行く、と、繼母は

「そんなことが役に立つものですか、お氣の毒だがお前さんを連れて行く譯には行かないの、着物もないし、舞踏も知らないんだから、私達まで耻をかゝなくつちやならない」

と言つて、プイと背ろを向いて、二人の娘と一緒に行つてしまひました。

みんな居なくなつた後で、消炭さんはお母さんの墓へ行つて、榛の木の下で、

「大切の〳〵私の木、サラ〳〵と動いて
金と銀を落してお呉れ」

と言ふと、いつもの鳥が金銀の着物と、銀で裝飾をした絹の上沓を上から落して呉れた。消炭さんは急いでそれを着て舞踏會へ行きました。

姉妹も繼母も消炭さんは家で灰の中の豆を拾つてゐるとばかり思つてゐますから、これが消炭さんとは夢にも知らないで、何處そのお姫樣だと思ひました。金銀の着物

を着た消炭さんの姿は本當にお姫樣のやうに美しかつた。

直きに王子は消炭さんの側へ來て、手を執つて、舞踏場へ連れて行く、王子は他の者は誰も相手にしたがらないで、初から終まで消炭さんの手を離しません。誰か他の男でも側へ寄ると、王子は突退けるやうにして、「これは私の相手だ」と言ひました。

二人は夕方まで踊つてゐましたが、やがて娘が歸りたいと言ふと、王子は、

「私が送つて行つてあげよう」

と言つて、ついて來ます。何處の家へ入るか見屆けようと思つたからです。けれども娘は王子の手を振切つて、鳩小舍の中へ跳込んでしまひます、王子は娘のお父さんが家から出て來るのを待つてゐて、今不思議な娘が鳩小舍の中へ駈込んだと言ひますとお父さんは、

「まさか家の消炭さんではあるまい」と思ひながらも斧を持つて來て、小舍の戸を壞して見ましたが、中には誰もゐなかつた。

家へ入つて見ると、消炭さんは汚い着物で灰の中へ横になつて居ました。烟突にはいつもの通りランプが點つてゐる。消炭さんは鳩小舍へ跳込むや否や他の口から跳出

して、榛の木の所へ行き、其處で立派な着物を脱いで墓の上へ置くと、いつもの鳥が又木の上へ持つて行つたので、直ぐに元の通り鼠色の上衣を着て、臺所の灰の中へ歸つてゐたのです。

次の日も夜會が續いて、繼母と姉妹が又出掛けてしまふと、消炭さんは榛の木の所へ行つて前のやうに、

「大切の〳〵私の木、サラ〳〵と動いて
金と銀を落してお呉れ」

と歌ふと、いつもの鳥が、前よりももつと立派な着物を上から落して呉れた。それを着て舞踏會へ行くと、みんなが其の美しさに見惚れる位でした。

王子は待焦れて、直樣消炭さんの手を執つて一緒に踊りました。王子はもう他の者とは踊る氣もありません。誰か來て消炭さんと踊らうとでも言はうものなら、王子は突退けるやうにして「これは私の相手だ」と言ひました。

日が暮れて娘が歸りたいと言ふと、王子は何處の家へ入るか見屆けようと思つて、後からついて來ましたが、娘は逃げ込むやうに、家の背の庭へ駈込んでしまひました。

庭には美しい果の房々とさがつた美事な大木がありましたが、娘はまるで栗鼠のやうに其の枝の中へ登つて行つたぎり、何處へ行つてしまつたか分らなかつた。それで王子は娘のお父さんが出て來るまでジッと待つて居た。

「不思議な娘が逃げてしまつたが、どうも此の木へ登つたやうだ」

と言ひますと、お父さんは「まさか家の消炭さんではなからう」と思ひながら斧を持つて來て、其の木を伐倒しましたが、木の上には誰も居なかつた。

臺所へ來て見ると消炭さんは、矢張り灰の中へ横になつて居ました。消炭さんは木へ登ると直ぐに蔭の方から跳降りて、立派な着物を、前のやうに榛の木の上の鳥に返して、また元の鼠色の上衣を着て居たのです。

三日目にも、繼母と姉妹が出掛けてしまふと、消炭さんは又お母さんの墓へ來て、

「大切の〳〵私の木、サラ〳〵と動いて
金と銀を落してお呉れ」

と言ふと、いつもの鳥が、今迄よりももつと〳〵立派な、ピカ〳〵した着物と、純金の上沓を上から落して呉れた。消炭さんが舞踏會へ行くとみんなが吃驚して、口も利

けない位でした。

王子は前のやうに消炭さんの側へつきつきりで、一緒に踊らうと言ふ者には、誰にでも「これは私の相手だ」と言ひました。

日が暮れて娘が歸りたいといふと、王子も後からついて來ましたが、娘は誰にも追つけない位に速く駈出しました。けれども王子は一つの計略を考へて、道中一面に松脂を蒔いて置いたので、娘が駈けて行く拍子に左の上沓が脱げて後へ殘りました。

王子が其の沓を拾つて見ると、花車な、小さな沓で、そつくり純金で出來てゐます。翌朝王子はそれを持つて娘のお父さんの所へ來て、

「此の黄金の上沓がピッタリと足にはまる者を私の花嫁にする」

と言ひました。

二人の姉妹はそれを聞いて喜んだ、二人共、花車な、美しい足をして居たから。姉の方が先づ自分の部屋へ入つて、お母さんの見る前でその沓を穿いて見たのですが、沓が小さ過ぎてどうしても拇趾が入らない。お母さんは側から小刀を渡して、

「その趾をお切り、お妃になれば、もう足で歩くには及ばないから」

と言つたので、娘は趾を切つて、無理やりに足を沓へ押込んで、痛さを隠しながら、王子の前へ行きました。

其處で王子は此の娘を花嫁にして自分の馬へ乘せて出掛けました。墓の側を通る時榛の木の上に二羽の小鳩が居て、斯う歌つた——

「背後を御覽、背後を御覽、
沓の上に　血がついてゐる、
沓が小さ過ぎる、背後にゐるのは
お嫁さんではないやうだ」

王子が背後を向くとポタ〳〵と沓から血が垂れてゐるので、再び馬を振向けて、偽の花嫁を元へ戻しました、これは本物では無かつたと言つて。

其處で今度は妹の方が沓を穿くことになつた。自分の部屋へ行つて、穿いて見ると、爪先だけは美事に入るが、踵がちと大き過ぎる。お母さんは側から小刀を渡して、

「その踵を少しお切り、お妃になれば、もう足で歩くには及ばないから」

と言つたので、娘は踵を切つて、無理やりに足を沓へ押込んで、痛さを隠しながら、

王子の前へ行きました。

其處で王子は此の娘を花嫁にして自分の馬へ乘せて出掛けました。榛の木の側を通る時、木の上に二羽の小鳩が居て、斯う歌つた——

「背後を御覽、背後を御覽、
　　沓の上に　血がついてゐる、
　　沓が小さ過ぎる、背後にゐるのは
　　お嫁さんではないやうだ」

王子が背後を向くと、ポタ〳〵と沓から血が滴れて、沓下が眞赤に染まつてゐます。馬を振向けて、僞の花嫁を元へ戻して、

「これも本物ではない、お前は他に娘は持たないか？」

と言ひますと、お父さんは、

「ハイ、もう一人消炭さんといふのがあります、私の先妻の娘ですが、これは花嫁になるやうなのではありません」

と答へる。其處で王子は其の娘を連れて來いと言ふ。繼母が口を出して、

「マア、飛んでもない！あんまりむさくるしくつて、とてもお目には掛けられません」

と言つたが、王子は何でも連れて來いと言つて聞きませんでした。

其處で消炭さんは手と顏を洗つて座敷へ來ました。王子の前へお辭儀をして、黃金の沓を受取り、床几に腰を掛けて、重い木靴を脫いで、其の上沓を穿くと、一分の隙もなくピッタリと足へはまりました。消炭さんが起ち上ると、王子は其の顏をジッと眺めてゐましたが、自分が一緒に踊つた美しい娘でしたから、

「これが、本當の花嫁だ」

と言つて躍上つて喜びました。

繼母と二人の姉妹は吃驚して、顔色を變へたが、王子は消炭さんを自分の馬へ抱上げて、ズン〳〵と出掛けて行つた、榛の木の下へ來ると小さな、白い、二羽の鳩が、斯う歌つた——

「背後を御覽、背後を御覽、
　沓の上には血がついてゐない、
　ピッタリ足に合つてゐる、背後にゐるのが
　これこそ本當のお嫁さん」

と歌つてしまふと、鳩は枝から下りてヒョイと、消炭さんの兩方の肩へとまりました。

程なく盛んな結婚式が擧げられ、其の祝典には意地惡の姉妹も來て、結婚の行列に加はつて、敎會へ行きました。其の時姉は右側を、妹は左側を歩いて行つたが、二羽の鳩が二人の眼を片方宛啄き出した。歸路には姉が左側を、妹が右側を來ると、鳩が又二人の殘つた眼を啄き出しました。それで姉妹は惡い事をした報で、とう〳〵盲目になつて、悲しい一生を送りましたとさ。

むかし一人の未亡人が、二人の娘を持つて居りました。一人の娘は美くしくて且つ勤勉家でしたが、一人は醜い上に怠惰者でした。けれども醜い方が本當の娘でしかも、母親はそればかり可哀がつて、他の娘はまるで下女のやうにして、嫌な仕事はみんなそれにさせました。此の可哀想な娘は毎日毎日往還へ出で、噴井戸の側へ坐つて、糸を紡らせられるので、終には指から血が流れました。或る日のこと紡錘が血だらけになりましたので、井戸の所へ膝を突いて、それを洗はうとしたが、運悪く水の中へ取落してしまひました。

娘は泣きながら繼母の所へ行つて、自分の粗忽を話しますと、繼母は口ぎたなく娘を叱り飛ばして、腹立まぎれに斯う言ひました。

「お前が紡錘を落したのだから、自分で取つておいでなさい！」

娘は又井戸の側へ歸つて來たが、何うしてよいのか分りませんから、途方に暮れて終に紡錘と一緒に井戸の中へ跳込みました。それから後はもう何も分らなくなりまし

たが、我に復つた時には、娘は美くしい牧場に居て、自分の周圍には日が輝き、色々な花が一面に咲き匂つてゐました。

娘は起きて、歩いて行くと、一軒の麵麭屋へ來ました、すると竈の中に一杯詰まつてゐる麵麭が、聲を出して、

「出して下さい、出して下さい、燃えちまひます、もう燒け過ぎる位です」

と言ひました。娘は竈の側へ寄つて、麵麭掻を取つて、一つ〳〵麵麭の塊を掻出してやりました。

それから又先へ行くと、果が一杯に實つた林檎の樹があつて、

「搖つて下さい、搖つて下さい、林檎はみんな熟しきつてゐます」

と言ひました。娘が木を搖ると、林檎が雨のやうに落ちました。それを一つ殘らず落して、みんな一つ所へ集めて置いて、娘は又先へ行きました。

最後に一つの小屋へ來た。小屋の中からは、一人の老女が、此方を覗いて居ました。其の人はあんまり大きな齒をしてゐるので、娘は初め吃驚して逃出さうとしましたが、老女は後から娘を呼戻して、斯う言ひました。

「何も恐がることはないよ、私の家におゐで、お前がよく家の事をして呉れれば、お前も運がよくなるよ。たゞ私の床を始末する時に少し骨を折つて、羽が飛ぶ位強く振つてお呉れよ、然うすると世界には雪が降るのだ。私は「雪の小母さん」だよ。」

老女が優しく言つたので、娘はやうやう安心して、老女の言ふ通りに其處で働く氣になりました。それからは何事も老女の言付通りにして、いつも精を出して寢床を振ひました。其の度毎にまるで雪の舞ひ降りるやうに羽蒲團の羽が飛散るのです。然ういふ風にして娘は幸福な日を送つて、忌な事は少しも聞かずに、毎日毎日色々な御馳走をこしらへては食べてゐました。

暫時の間娘は老女と一緒に居ましたが、其の中に何だか急に悲しい心持になつて來ました。初の中は何の爲だか自分でも分らなかつたが、最後に思鄕病だといふことが分りました。娘は家よりも爰の方がどの位いゝか分らないのですが、それでも何だか家へ歸りたくなつて堪らないのです。

其處で娘は老女に言ひました——

「私は家へ歸りたい病氣になりました。家へ行けばどうせ爰に居るやうな譯にはまゐ

りませんが、それでもどうしても歸りたうございます」

すると老女が答へました——

「お前が家へ歸りたくなつたのは結構だ。お前はよく蔭日向なく勤めて呉れたから、私はお前を歸してあげる」

然う言ひながら娘の手を執つて、大きな扉の所へ連れて來ました。娘が其の下を通る時に、黄金が夕立のやうに降つて來て、全身が黄金で包まれる位澤山の黄金が娘の上に掛かりました。

「これはお前がよく働いて呉れたお禮だよ」と「雪の小母さん」は言つて、尙ほ其の外に娘が井戸へ落したのと同じ紡錘を娘の手に渡しました。

然う言つてしまふと扉が閉まつて、娘はもう地へ降りて、お母さんの家の近所まで來て居ました。庭へ入ると、雄鷄が井戸の上に居て、斯う言つて鳴きました——

「コケコーヨー！
黄金の娘が歸つたヨー！」

それから娘がお母さんの所へ行くと、全身が黄金で包まれてゐたので、お母さんは大

喜びでした。

娘は今迄のことを殘らず話しました。お母さんは繼娘がこんなに金持になつて歸つて來た譯を聞くと、あの醜い、怠惰者の、自分の娘にもそんな運を持たせたいと思ひました。

其處で怠惰者の娘はお母さんの指圖で、噴井戸の側へ坐つて、糸を紡り、紡錘を血だらけにするやうに、自分の指へ刺を差し、それから紡錘を井戸へ投込んで置いて、其の後から自分も跳込みました。

すると此の娘も同じやうに美くしい牧場へ來ました。それから同じ道を歩いて、麵麭屋の窯の所へ來ると、麵麭が

「出して下さい、出して下さい、燃えちまひます。もう燒け過ぎる位です」

といひました。けれども怠惰者は

「手が汚れるから御免だよ」

と言つてずん〳〵行つてしまひました。

直きに林檎の樹の所へ來ると、林檎が又

「搖つて下さい、搖つて下さい、林檎はみんな熟しきつて居ます」

といひました。けれども娘は、

「みんな綺麗だわね、一つ位は私の頭の上へ落ちさうなものだ」

と言つて、ずん〳〵行つてしまひました。

とう〳〵「雪の小母さん」の家へ來ましたが、娘は老女の齒の大きいことは前以て承知してゐたから、驚きもせずに直ぐに老女に使はれることになりました。初の日は一生懸命に精を出して、老女の言ふ通りに何でもハイハイと言つて動きました。かうやつて置けば黃金が貰へると思つたからです。けれども二日目にはもう怠け出し、三日目になると、一層ひどくなつて、終には朝も起きないやうになりました。寢床の始末でも決して言付けられた通りにはしなかつたから、いつも羽が飛立つといことはありませんでした。其處で老女もとう〳〵持倦んで、暇をやると言ふと、怠惰者は却つて大喜びで、「やつと、黃金の雨が降る」と思ひました。

雪の小母さんは娘を扉口へ連れて行きました。而して娘が其の下へ來ると、上から降つて來たのは、黃金ではなくて、松脂でした。

露光量違いの為重複撮影

「さア、それがお前のお禮だよ」

と言ふと、老女はピツシヤリと扉を閉めてしまひました。

其處で怠惰者は松脂だらけな身體で家へ歸りました。すると井戸の上に居た雄鷄が、それを見て斯ういつて鳴きました。

「コケコーヨー！
松脂娘が歸つたヨー！」

けれども松脂はいつまでも此の娘の體へこびりついて、死ぬまで落ちませんでした。

矮人の土産

露光量違いの為重複撮影

「さア、それがお前のお禮だよ」

と言ふと、老女はピツシヤリと扉を閉めてしまひました。

其處で怠惰者は松脂だらけな身體で家へ歸りました。すると井戸の上に居た雄鷄が、それを見て斯ういつて鳴きました。

「コケコーヨー！

松脂娘が歸つたヨー！」

けれども松脂はいつまでも此の娘の體へこびりついて、死ぬまで落ちませんでした。

矮人の土産

或る時仕立屋と鍛冶屋が道連になつて旅へ出ましたが、或る日のこと太陽が山の向ふへ落ちてしまふと、遠くの方で幽かな音樂の音が聞え出して、次第々々に明亮として來ます。其の調子は餘り聞いたことの無いものでしたが、併し二人の旅人が終日の疲勞も忘れて、歩いてゐた位、人の心を引立てるやうな調子でした。

とある丘の麓まで來ると、丁度月が昇つて、其の丘の上で、澤山の小さな男や女が、手を繋ぎ合つてグル〳〵廻りながら、陽氣に踊つてゐる姿が見えました。而して此の踊りに連れて何とも言へない佳い調子で歌つて居るのです、これが遠くから聞えたあの音樂でした。

是等の矮人の眞中には一人の老人が坐つて居ました。其の老人は他の者より少し背

が高く、雜色の上衣を着て、鐵褐色の腰まで屆く程の長い髯を垂らしてゐました。

二人は呆氣に取られて、其處へ腰を屈めて、踊りを見てゐると、其の老人が此方を見て、手眞似で仲間へ入れといふ、すると踊りの輪がパット開いて、二人を入れるだけの場所を明けました。鍛冶屋は駝背でした、而して不具者によくあるやうに臆面なしでしたから、直ぐに仲間へ入りましたが、仕立屋は初めの中は氣怯れがして、後退ばかりしてゐたが、其の內に踊りの面白さに釣込まれて、とう〳〵勇氣を出して、これも仲間に入りました。

すると踊の輪は又窄まつて、矮人共は狂氣のやうに歌つたり、踊つたりし出した。其の間に例の老人は帶に垂げた廣刄の小刀を執つて、研いでゐましたが、研いでしまふとそれを持つて旅人の方を見廻してゐます。

二人は少し氣味が惡くなつて來たが、其の時はもう何を考へる暇もなかつた。老人は初めに鍛冶屋を捕へ、次に仕立屋を捕へて、手早く二人の髭と頭髮をグル〳〵と剃つてしまひました。けれども老人は仕事を濟ますと、さも心易げに、自分の惡戯をよく逆ひもせずに辛抱して居て呉れたと言はぬばかりに、二人の肩を輕く叩いたので、二

人の恐怖は即座に消えてしまひました。

すると老人は、直き側に積んであつた石炭の堆を指で差して、而して手眞似であれを衣嚢へ握み込んで行けと言ひました。二人は其の石炭が何の役に立つか知らなかつたが、兎に角言はれる通りにして、而して今宵の宿を探しながら村のある方へ行きました。

二人が其の次の谷間へかゝつた時に、丁度近所のお寺の時計が十二時を打つた。それと同時に歌の聲はパッタリと歇んで、みんな何處かへ行つてしまひ、今迄賑つてゐた丘には月の光が冴え渡るばかりでした。

二人は寢る所を見つけて、藁の床を拵へ、銘々に自分の上衣を掛けて寢ましたが、ひどく疲勞れてゐたゝめに、衣嚢の石炭を出すのも忘れて、眠つてしまひました。寢てゐる間も手や足の上に何か大變重い物でも載つてゐるやうな氣持でしたが、翌朝眼が覺めて、衣嚢を打蒔けて見ると、石炭だとばかり思つて居たのが、黄金になつて出て來た時には、自分の眼がどうかしたのではないかと思つた位でした。そればかりでなく剃られた筈の髭や頭髪も、一晩の中に元の通りに伸びて居ました。

二人は急に大金持になりました。中にも鍛冶屋は慾張の性分として仕立屋よりも餘計に衣嚢へ握み込んで來ましたから、金高も仕立屋に比べると、半分位も餘計でした。

けれども持てば持つ程餘計に欲しくなるのが慾張りの癖ですから、此の鍛冶屋も直き其の癖を出して、一日二日すると、仕立屋に向つて、又山の老人の所へ行つて、もつと黄金を貰つて來ようではないかといふ相談をかけました。

「私はもう澤山だ」と仕立屋は言つた。「これだけあれば立派な店が持てるから、これでレコ(仕立屋は約束した女の事を斯う言つた)と一緒になつて、幸福に暮して行ける」

それでも仕立屋はお附合に出發を一日だけ延ばしてやりました。

日が暮れると鍛冶屋は、體裁のいゝやうに、大きな袋を二つ肩へかけて、丘の方へ出掛けて行きました。而して直きに前の晩の通り歌つたり、踊つたりしてゐる矮人の仲間を見つけますと、老人は鍛冶屋の姿を見てニコ〳〵しながら、前の晩の通りなことをして、終に石炭の堆へ指を差した。鍛冶屋は待つてゐましたとばかりに、直樣石炭を衣嚢へ詰込んで、大喜びで歸つて來ると、上衣を引掛けて寢てしまつた。而して心の中で「黄金がいくら重くつても、忍耐してゐよう」と言つて、明朝目の覺めた時

のことを考へながら、グッスリと眠つてしまひました。

それですから、翌朝目が覺めて、いくら衣嚢を探つて見ても、黄金らしいものは一つも無く、眞黑な石炭がゾロ〳〵と出て來た時の失望はどんなでしたらう。それでもまだ前の晩の黄金があるからと思つて氣を取直して見たが、何といふことでせう。それまでも石炭に變つてゐるではありませんか、鍛冶屋は腹立まぎれに石炭の粉だらけの手で自分の額を打つた。而して其の時初めて自分の頭に一本の毛もなくつて、顎のやうにツル〳〵してゐることに氣がついた、不幸はそればかりではなく、一晩の中に背中にあるのと同じ瘤が、新らしく胸へも出來てゐました。

鍛冶屋はこれを見ると、つく〴〵自分の强慾の罰だと思つて、聲を立てゝ泣き出しました。人の好い仕立屋は其の時目を覺まして、色々と此の不幸な男を慰め、是迄道連になつて來たのだから、自分の財貨を半分宛分けて、此の先も一緒に旅を續けようと言ひました。

仕立屋は自分の言つたことを守りましたが、可哀想に此の鍛冶屋は一生二つの瘤を抱へて、頭の禿を隱すために始終假髪を被つて居ましたとさ。

小鳥と小鼠と臘腸

むかし〳〵鼠と鳥と臘腸が一緒に家を持ちましたが、みんなが中よく働くので、直きに金持になりました。毎日々々森へ行つて木を拾つて來るのが鳥の役目で、水を汲んだり、火を焚いたり、食卓の始末をしたりするのが、鼠の役、料理をするのが臘腸の役でした。

けれどもよくなればよくなる程、其の上にもよくしたいのが人情です、或る日鳥は家へ歸る途で、他の鳥に逢つたので、自慢さうに自分の今の有様を話しました。けれども其の鳥は他の者が家で樂をしてゐるのにお前ばかりがそんなに働くのは馬鹿だと言つて笑ひました。

鼠は火を焚きつけて、水を汲んでしまふと、自分の部屋へ入つて、食卓の支度をする時までは休んでゐる、又臘腸は始終火の側についてゐて、食物の煮え工合に氣を配り、食事の時間が來ると、ソップやシチューを三四遍自分の體で攪廻してそれに味や香氣をつけるだけのことです。それで鳥が歸つて來て荷を卸すや否や、一同が食卓に着いて、食事が濟むと、もう翌朝まで何も知らずに寢てしまふのです。それは全く何

不足の無い生活でした。

けれども翌日になると、鳥はもう森へ行くのは嫌だと言ひ出した、もう永いこと奴隷になつてゐたから、一度交代して、新しい規則でやつて見ようぢやないかと言ふのです。鼠と臘腸は言葉を盡くしてそれに反對して見ましたが、鳥はどうしても自分の言ふ通りにして見たいといつて、肯きません。其處で鬮引をすると、木を拾ふ役が臘腸に當り、鼠が料理をし、鳥が水を汲むことになりました。

すると何んなことが起こつたでせう？　臘腸は森へ行き、鳥は火を焚きつけ、鼠は鍋を掛けました。而して鳥と鼠は臘腸が明日の薪を取つて、歸つて來るのを待つてゐましたが、待つても、待つても、臘腸は歸らないので、二人は何か變つた事でもあるのではないかと心配し出して、鳥が途中まで見に出ました。家の近所で犬に逢つて聞くと、臘腸は其の犬が捕へて、食つてしまつたのだといふことが分りました。鳥はお前は盗賊だと言つて犬を責めましたが、犬の方ではあの臘腸には贋の文字が書いてあつたから、食つてもいゝと思つて食つたのだと言張るので、何の役にも立ちませんでした。

鳥は落膽して、木を拾つて、背中へ載せ、家へ飛び戻つて、自分の見たり、聞いたりしたことを鼠に話しました。兩人共弱り込んでしまひましたが、それでも出來るだけのことをして、此の先も一緒に暮して行くことに決めました。

其處で鳥は食卓の支度をする、鼠は料理にかゝつて、いつも臘腸がしたやうに、鍋の中へ入つて、ソップを攪廻したり、香氣をつけたりしようとしたが、可哀想に！中へ入るか入らないに、鼠は皮も毛も燒け爛れて、とう〳〵死んでしまひました。

鳥が食事をしようと思つて來て見ると、料理人が居ない！　其處で憤然として自分で拾つて來た木を蹴散らしながら、彼方此方を飛び廻つて、呼んだり、搜したりしたが、料理人は出て來る筈はありません。其の中に蹴散らした木へ火がついて火事になりかけたので、鳥はあわて〻小川へ水を汲みに行きましたが、手桶と一緒に川の中へ落ちて、其のまんま上ることが出來ずに、ブク〳〵と川の底へ沈んでしまひましたとさ。

摂　指

むかし〳〵一人の貧乏な百姓がありました。百姓は毎晩圍爐裡の側で、火をつゝきながら、妻君が糸を紡るのを見てゐたが、いつも二人で斯う言つて話しました。

「子供のないといふのは、張合の無いものだのう！　他家ではあんなに賑やかに、樂しさうにしてゐるのに、家ばかりはいつもシーンとしてゐる」

「然うですよ！」と妻君も嘆息をついた。「一人でもいゝから、私は此の拇指位な小いのでも、かまはないから一人あつたら、どんなに仕合せだか分らない！　本當に可哀がつてやるんだがねへ」

それから少し經つと妻君が加減が惡くなつて、七月目に一人の男の兒が生れました。此の兒は手も足も滿足でしたが、たゞ何處も彼も小くつて、人の拇指位の大さしかありません。それで二人はうつかり喋舌つたことが本當になつたと話し合つて、此の兒に「拇指」といふ名をつけました。

夫婦は毎日々々いろ〳〵な物を此の兒に食べさせたが、いつまで經つても生れた時

のまんまで、少しも大きくなりませんけれども、其の容子を見てゐると、其の敏捷くつて、而して落着いて居る所が、何をやらしても出來さうに見えました。

或る日百姓は林へ木を伐りに行く支度をしながら、獨語のやうに言ひました。

「誰か馬車を曳いて後から來て呉れる者があるといふのだがなア」

「お父さん！」と「拇指」が言つた。「僕が馬車を曳いて行きませう、僕一人で大丈夫ですよ、間違なく曳いて行きますよ！」

お父さんはこれを聞くと、笑ひ出して、言つた——

「飛んでもない。お前の體では手綱は曳けないよ」

「お父さん、構ひません。お母さんが馬の支度さへして呉れゝば、僕が馬の耳の中へ坐つて、道を敎へてやる」

「ウム、試しにやらして見るか」とお父さんが言つた。

で、時刻が來ると、お母さんは馬の支度をして、「拇指」を馬の耳の中へ坐らせて置いて自分では又糸取りにかゝりました。すると「拇指」は「ドウ〳〵」と聲をかけながら馬を逐つて行きました。それで馬はまるで主人に逐はれて居る通りにズン〳〵と

林の方へ眞直に馬車を向けて行つた。丁度曲り角へ來ると、「拇指」は耳の中から「ドウ〳〵」と聲をかけた。其の時二人の旅人が通りかゝつたが、其の一人が、

「オイ、君！」一人が他の者に言つた。「何うしたんだらう？　馬車が來て、馬方の聲はするが、人が居ない」

「これは不思議だ」ともう一人が言つた。「後から行つて馬車の止まる所を見屆けようぢやないか」

馬車は眞直に林の奥へ進んで、無事に木の伐倒された所まで行きました。「拇指」はお父さんの姿を見るや否や聲をかけた。

「お父さん、馬車を曳いて來たよ、さア早く僕を下しと呉れ」

百姓が左の手で馬の手綱を執つて、右の手で小さな息子を馬の耳の中から出してやると、「拇指」はさも嬉しさうに自分で藁の上へ坐りました。二人の旅人は此の豆のやうな小僧を見ると驚いて何も言へなかつたが、やがて一人の方がもう一人を側へ呼んで、潛と言つた。

「この豆僧を町へ連れてつて見せ物にしたら屹度儲かるぜ。買はうぢやないか」

其處で二人は百姓の側へ行つて言ひました。

「お前の息子を賣つて貰へまいか？　私達は大事に世話をするがね」

「否」と百姓が言つた。「これは俺の寶です、いくら金を積んだつて賣る譯には行きません」

けれども「拇指」はこれを聞くと、いきなりお父さんの裾から這上つて、肩の上へ坐り、耳の側へ口を寄せて小さな聲で言ひました。

「僕をやつて下さい、直きに歸つて來ますから」

其處でお父さんは澤山お金を取つて、「拇指」を二人の旅人に賣渡しました。すると旅人が、「拇指」に何處へ坐るかと聞きました。

「エヽ」と「拇指」が答へて「僕を帽子の緣へ載せて下さい、僕は其處を歩き廻つて方々を見物して行きます。決して落ちるやうなことはありません」

二人は「拇指」の言ふ通りにして、「拇指」がお父さんに別離を訣げるのを待つて出掛けました。日が暮れると「拇指」が一寸と下して呉れと言ひます。「拇指」を自分の帽子へ載せてゐた方の人は、少しばかり苦情を言つて見たが、それでも終に頭の上から

取つて、路傍の畑へ置きました。と、見る間に「拇指」はチョコ〳〵畦の中を駈け廻つて、とう〳〵鼠の孔へ辷り込んでしまひました。

「皆様、お寝み、僕には關はず先へ行つて下さい」と「拇指」は孔の中から聲を掛けて、笑ひながら、底の方へ入つて行きました。

二人は杖を孔の中へ突通して見たが、何にもならなかつた。其の内に眞暗になつてしまひましたので、二人はもう仕方なしに、プン〳〵怒つて、一文無しで家へ歸つて行きました。

二人が行つてしまつた後で、「拇指」は隱場所を這出して來ました。

「こんな眞暗な所を歩くのは險呑だ、直きに頭か足を折るに違ひない」

と言つて見廻してゐたが、丁度よく蝸牛の拔殼が見つかつたので、

「難有い！　爰で寝てゐれば大丈夫だ」

と言つて、其の中へ這込んで行きました。

「拇指」がウト〳〵しかけると、丁度二人の人が通りかゝる足音がして、一人がもう一人に話すのが聞えました。

「あの牧師の金を何うして取つたものだ？」

「教へてやらうか」と「拇指」が口を出した。

「何だ？」と盜賊はギョッとして、「誰か何か言つたやうだ」

然う言つて二人は立停まつて、耳を澄ましてゐる。すると「拇指」が又言つた——

「僕を連れてつとくれ、手傳つてやるから」

「何處に居るんだ？」と盜賊が聞く。

「地面を搜して、聲のする方を見て御覽」と「拇指」が言ふ。

盜賊は四邊を見廻して、やつと搜り當てゝ、殼の中から「拇指」を摘み上げた。

「何！　貴樣がどうして手傳ふのだ。此の豆小僧が？」

と二人が言つた。

「いゝかね、僕が鐵の格子の間から其の牧師の部屋へ忍込んで行つて、お前達の持つて來いつてものを持出してやるよ」

「宜からう」と盜賊が言つた。「貴樣の手際を見てやらう」

牧師の家へ來ると「拇指」は部屋へ忍込んで、有だけの聲を出して、怒鳴つた。

「オイ、爰にある物をみんな持つてゆくのかよう？」
盗賊は吃驚して
「小さな聲をしろ、誰か起きるといけねへ」
と言つたが、「拇指」は分らない風をして、尙ほと大きな聲を出して言つた。
「オーイ、爰にある物をみんな持つてゆくのかよう？」
この聲で其の部屋に寢てゐた下女が目を覺まして、床の上へ起上つて、耳を澄ましてゐた。盗賊は度膽を拔かれて少しばかり逃げ出したが、豆小僧が自分達に調戯ふのだと思つたから、元氣を取直して、又引返して來て、何でもい〻から急いで持つて來て、渡すやうにと小聲で言ひました。
すると「拇指」は尙ほ大きな聲を出して
「みんな持つてくから、手を出せよう！」
と怒鳴つた。これが下女の耳へ瞭然と入つたので、下女は寢床から跳出して、扉を開けました。盗賊はまるで獵夫に逐はれた獸類のやうに逃げて行つてしまつた。下女は何も見えなかつたので、燈火を取りに行きました。

其の間に「拇指」は納屋へ逃げ込んでしまつたので、下女は歸つて來て、部屋中を見廻し、而して隅から隅まで搜したが、何も居る筈はありません。其處で下女は眼を開いてゐて夢を見たに違ひないと思つて、又寢床へ入つてしまひました。
「拇指」は枯草の中へ潛り込んで、これはい〻寢床だと思つた。而して夜が明けるまで爰で寢んで、夜が明けたら兩親の所へ歸らうと思つて寢てしまひました。
けれども世の中には樣々な艱難辛苦があるのですから、「拇指」の難儀もまだこれだけでは濟みませんでした。
夜が明けると下女は起きて牝牛に草をやる支度をした。下女は一番先に納屋へ來て枯草を一抱へ抱へて行つたが、其の枯草の中には可哀想に「拇指」が何も知らずに寢てゐました。而して眼が覺めた時には、もう牝牛の口の中へ入つて居た。
「ア、、善い心持だ！」と「拇指」は眼を覺まして言つた。
「オヤ、どうしてこんな水車の中へ入つて來たらう！」
けれども直きに本當のことが分つたので、今度は齒の間へ挾まらないやうに要心してゐたが、其の內に牝牛の胃の腑へ辷り込んでしまつた。

「此の部屋には窓がない」と「拇指」は獨語を言つた。「日も入らないし、明りもない」
頭の上の方はいよ〳〵様子が惡くなつて來ます。上からは絶えず枯草が入つて來るので、塲所がだん〳〵と窮屈になるのです。そこで「拇指」は恐くなつて、有りたけの聲を出して、騒ぎました。

「もう草は要らないよう！もう草は要らないよう！」

其の時丁度下女が牝牛の乳を搾つてゐましたが、誰も居ないのに聲ばかり聞こえて加之も其の聲が昨夜聞いた聲と同じなので、吃驚して腰掛から立つ拍子に、牛乳を轉覆してしまひました。下女は主人の所へ駈付けて言ひました。

「先生、大變です、牝牛が物を言ひます」

「お前は氣が狂つたんだ」と牧師は言つたが、それでも、何うしたのかと思つて、牛小舍へ行つて見ました。敷居を跨ぐか跨がない内に「拇指」が又大きな聲で、

「もう草は要らないよう！もう草は要らないよう！」

と言ひましたので、牧師も吃驚して、これは惡魔が牝牛の中へ入つたのだと思つて、下女に言付けて牝牛を殺させてしまひました。

其處で牝牛は殺されたが、「拇指」の入つて居た胃の腑は其のまんま肥堆へ捨てられました。「拇指」は出ようと思つていろ〳〵に骨を折つて、やう〳〵頭の出るだけの穴を開けましたが、其の時又思掛けない新規な災難が起こつて來ました。それはちやうど、其の時、一匹の饑ゑた 狼が來て、一呑に其の胃の腑を飲んでしまつたからです。

けれども「拇指」はそれでもまだ力を落さないで、狼だつて理窟は分るだらうと思つて腹の中から聲をかけました。

「オイ、狼さん、甘い物のある所を敎へてやらうか」

「何處にあるんだ」と狼が聞いた。

「これ〳〵の家なんだが、お前は溝から這込まなけりやいけない、菓子だの、燻肉だの、臘腸だのが、食べきれない程あるよ」と「拇指」が言つて、自分のお父さんの家をよく敎へてやりました。

狼は二度までは聞かずに其の晩直ぐと溝から臺所へ忍込んで、腹一杯詰込んで、前に入つて來た道から逃出さうとしましたが、お腹が膨れたので、どうしても出られま

せん。其處で、待構へて居た「拇指」は、憐れな狼の腹の中で、大騒ぎを初めて、有りたけの聲で叫び立てました。

「靜かにして居ないか？」と狼が言つた。「家の者が眼を覺ますと大變だ！」

「オイ〳〵！」と「拇指」が大きな聲をする。「お前はもう腹一杯食べたから、今度は俺が樂みをする番だ」

然う言つて前よりも大きな聲をして騒ぎ立てました。

とう〳〵お父さんとお母さんが目を覺まして此の部屋の外まで來て、戸の隙間から覗きました。而して狼が中であばれてゐるのを見ると、直ぐに駈出して行つて、てん〴〵に武器――お父さんは斧を、お母さんは鎌を――取つて來ました。

「お前は後からおいで」とお父さんは然う言ひながら部屋へ入つて來た。若し俺の一撃で死なゝかつたら、お前もそれで斬つて呉れ。ならば、首を斬る方がいゝ」

「拇指」はお父さんの聲を聞くと、中から聲を立てました。

「お父さん、僕は爰に居るよ、狼の腹の中に」

「難有い！」とお父さんが、大喜びで言つた。「大切な息子が見つかつたよ」

然ういつて、お母さんの方を向いて、若し傷でもつけるといけないからと言つて、鎌を置いて來させました。其處で斧を振上げて狼の頭を打つと、一撃で死んでしまつたので、今度は小刀と剪刀を持つて來て狼の腹を斷割つて、小さな息子を出してやりました。

「アヽ」とお父さんが言つた。「どんなにお前のことを心配してゐたと思ふ」

「然うですか、お父さん」と「拇指」が言つた。「僕は澤山世の中を見て來ました。難有い！　これでやつと息がつける」

「お前は何處へ行つてたのだへ？」とお父さんが尋ねた。

「僕は鼠の孔にも、蝸牛の殼にも、牝牛のお腹にも狼のお腹にも入つてゐました。これからもうずつと家に居るでせう」と「拇指」が言つた。

「然うだ、もういくら金を積んだつてお前を賣るこつちやアない」

兩親は小さな「拇指」を抱きあげて、接吻しながら斯う言ひました。それから二人

は「拇指」にいろ〳〵なものを食べさせたり、飲ませたりして、衣服も旅行中にだいなしになりましたから、新らしい衣服を縫つて着せましたと、さ。

雪子姫

みましたが、其の兒は色が雪のやうに白く、唇が血のやうに赤く、髪が黒檀のやうに

一度冬の眞中でしたが、羽のやうな雪がヒラ〳〵と空から舞降りて來る時に、妃は自分の部屋の窓の所で縫物をして居ました。其の窓には黒檀の枠がはまつて居た。妃は折々雪を眺めては、せつせと針を運んで居ましたが、チクリと指を刺したので、血が三滴雪の上へ落ちました。其の血の色が眞白な雪の上で、如何にも赤く、鮮かに見えたので、妃はひとりで斯う言ひました。

「オ、、私は此の雪のやうに白く、此の血のやうに赤く、此の枠の木のやうに黒い兒を產みたい！」

それから少し經つて、妃は一人の女の兒を產

黒かつたので、「雪子」といふ名をつけました。けれども妃は此の兒が生まれると直ぐに死んでしまひました。

一年ばかり經つて王樣は別な妃を迎へました。其の妃は大變に美しい人でしたが、高慢で、氣位が高く、自分よりも縹致の好い人があるといふことが何よりも氣になりました。で、此の妃は一つの不思議な鏡を持つてゐて、いつも其の前へ立つと、中を覗き込んで、斯う言ひます——

「鏡、鏡、壁の上の鏡、
誰が一番美しい？」

すると鏡が斯う答へる——

「貴女が一番美しい」

妃はそれで安心するのです。此の鏡は嘘を言はないといふことを知つて居るから。

其の內に雪子姫はだん〳〵成長して、日增に可愛らしくなりました。而して七歲になつた時にはもう太陽のやうに美しくなつて、妃よりもずつと美しくなりました。

或る日妃は鏡の前へ行つて、いつものやうに、

「鏡、鏡、壁の上の鏡、
誰が一番美しい？」
と言ふと、鏡は斯う答へました。
「貴女は本當に美しい、
雪子はもつと美しい」
妃はこれを聞くと胸がドキリとして、妬ましさに顔の色を黄くしました。それからは雪子姫のことゝいふと眼に角を立てゝ、酷く當るやうになつた。その妬みと嫉みは雑草のやうに日増に妃の胸の中で伸びて行つて、終ひには晝も夜もじつとしては居られない位になりました。最終に妃は獵夫を呼んで言ひました——
「あの兒を森へ連れて行つて、もう二度と私の目に觸れないやうにしてお呉れ。お前はあの兒を殺して、其の證據に心臓と舌を持つて來て見せるのだよ」
獵夫は畏つて姫を連れて行きましたが、獵夫が短刀を拔いて何も知らない姫の胸へ突立てようとした時に、姫は泣き聲を立てゝ、斯う言ひました——
「ア、、獵夫や、殺さないでね、私は森の奥へ入つて行つて、もう家へは歸らないか

ら」
これを聞くと獵夫の心が和ぎ、姫の可愛らしい顔を見るともう可哀想でたまらなくなつて來たので、獵夫は斯う言ひました——
「それでは早くお逃げなさい、ね、姫様」
心の中では「屹度野獸に食はれてしまふだらう」と思ひましたが、それでも姫を自分の手で殺さなかつたと思ふと、心の中から重い石でも脱れたやうな氣がしました。其の時丁度若い野猪が其處へ跳出して來たので、獵夫は直ぐに捕へて、それを殺し、舌と心臓を取つて、姫の死んだ證據に妃の所へ持つて行きました。すると妃は本當に雪子姫は死んだのだと思つて、その舌と心臓を鹽燒にして、自分で食べてしまひました。
さて憐れな姫は淋しい森の中へ獨りぼッちで取遺されたので、恐くつて恐くつて、木の葉の音を聞いても悒々する位、初めは何方へ行つたらいゝのかまるで見當がつきませんでした。その内にやう〳〵歩き出して、尖つた石の上や、茨藪の中を駈けて行くと、後から野獸が從いて來たが、何の害をも加へなかつた。姫は歩いて、歩いて、も

う歩けなくなるまで駈け廻りました、而して日暮方になつて一軒の小家へ辿りついて休むつもりで中へ入つて行きました。家の中にある物は何もかも小さな物ばかりでしたが、それが又何とも言へない程綺麗で瀟洒して居ました。

中程には小さな食卓が据えてあつて、其の上はもう整然と食事の支度が出來て、白い布を掛けた上に七つの小さな皿が並び、銘々の皿に匙と小刀と肉叉が附いて、其の外に七つの小さな盃が添へてあります。壁際には七つの小さな寢臺が一列に並び、一つ〳〵に雪のやうな敷布が敷いてあります。

雪子姫は大層腹も減き、咽も渴いて居まだが、それでも、一人前の御馳走をすつかり平げては惡いと思つて、銘々の皿から粥と麵包を少し宛食べ、銘々の盃から葡萄酒を少し宛飲みました。それが濟むと、大變に疲れて居たから、一つの寢臺へ寢て見ましたが、どうも旨く體に適はないので、順々に他の寢臺へ寢て見ました。けれども長過ぎたり短過ぎたり、堅過ぎたりして、丁度好いのがありませんでしたが、七番目になつてやう〳〵體に適ひました。其處で其の寢臺へ入ると、神樣にお祈りをして、眠つてしまひました。

日が暮れると家の主人が歸つて來ました。それは毎日山へ行つては鑛を掘るのを仕事にしてゐる七人の矮人でした。矮人達は七つの燈へ火を點けると、忽ち室中が明るくなつたので、直ぐに何もかも順序が狂つてゐるのを見て、誰か入つた者があるといふことが分りました。

第一の矮人が言つた——

「誰が私の椅子へ坐つたらう？」

第二の矮人が言つた——

「誰が私の皿で食べたらう？」

第三の矮人が言つた——

「誰が私の麵包を嚙つたらう？」

第四の矮人が言つた——

「誰が私の粥を啜つたらう？」

第五の矮人が言つた——

「誰が私の肉叉を使つたらう？」

第六の矮人が言つた——
「誰が私の小刀で切つたらう？」
第七の矮人が言つた——●
「誰が私の盃で飲んだらう？」
其の時第一の矮人が四方を見廻して、自分の寢床が凹んでゐるのを見つけて、聲を立てました——
「誰が私の寢床へ寢たらう？」
すると他の矮人も駈けて來て、銘々に自分達の寢床を眺めながら騒ぎ立てた——
「誰か私達の寢床へも寢た！」
けれども七番目の矮人は、自分の寢床の上に雪子姫の眠つてゐるのを見つけて、仲間に言つたので、みんなが駈けて來て、驚きの聲を立てながら、七つの燈を揚げて、雪子姫を照らしました。
「マア！　マア！」と矮人達が言つた。「何といふ奇麗な兒だらう？」
矮人達は大變な喜び方で、姫を起こさずに、ソット寢かして置くことにした。而して

七番目の矮人は一時間宛他の矮人と一緒に寢ることにして、其の晩を過ごしました。
翌朝雪子姫が目を覺まして、七人の矮人を見た時には、どんなに吃驚したでせう。
けれども矮人達は大層親切さうにして、何といふ名かと尋ねました。
「私の名は「雪子」です」と姫が答へた。
「何うして私達の家まで來たの？」と矮人達が又尋ねた。其處で雪子姫は繼母が自分を殺さうとしたこと、獵夫が助けて呉れたこと、それから終日中駈廻つて、とう〳〵此の家を見つけたことを話しました。すると矮人達は斯う言ひました——
「お前が私達の家のことを引請けて、煮燒や、洗濯や、寢床の始末や、縫物や、編物をして、家の中を整然と清洒にして呉れたら、爰へ置いて、何も不足の無いやうにしてあげよう」
「ハイ、何卒然うして下さい」と雪子姫が言つた。
それから雪子姫は矮人達と一緒に暮して、家の始末をよくしました。毎朝矮人は黄金を掘りに山へ出掛けて行き、日が暮れて歸つて來ると、もうすつかり食事の支度がしてあります。晝の中は姫が一人ぎりですから、矮人はいつも姫に斯う言ひました——

「お前の繼母さんに要心するんだよ、お前の爰にゐることが直きに知れるから。家の中へは誰も入れるんぢやないよ」

さて妃は、雪子姫の心臓と舌だと思つた物を食べてしまふと、これでもう自分よりも美しい人はないと思ひましたから、鏡の前へ行つて、言ひました——

「鏡、鏡、壁の上の鏡、
誰が一番美しい？」

すると鏡が答へました——

「貴女は本當に美しい、
七人の矮人と一緒に、
林の奥の谷間に居る、
雪子はもつと美しい」

これを聞くと、妃は大變に怒りました。此の鏡は嘘を言はないから、獵夫の言つたのは詐りで、雪子姫はまだ生きて居るに違ひないと思つたからです。それで何うして姫を殺してやらうかといろ〳〵に考へました。自分よりも美しい者のある中は、どう

しても氣が安まらないのです。最後に一つの計略を考へ出して、自分で自分の顔を染め、物賣女のやうな服裝をして、誰にも覺られないやうな姿になつて、七つの丘を越えて、七人の矮人の家へ來ました。而してトン〳〵と扉を叩いて、言ひました——

「小間物は要らんかな、小間物は要らんかな」

雪子姫は窓から覗いて、言つた——

「お婆さん、今日は、何を持つてるの？」

「上等の小間物、綺麗な小間物」と物賣が言つた。「笹縁は色々のがあります」

而して物賣は樣々の色の絹糸を織交せた笹縁を一筋手に取つて見せました。

「こんな人の好ささうなお婆さんなら入れても大丈夫だらう」と雪子姫は思つて、扉を開けて、美しい笹縁を一筋買つてやりました。

「嬢さん、どんなにかよく似合ふだらうよ！」と老婆が言つた。「さア、私がそれを結んで上げよう」

雪子姫は何の掛念もなしに、お婆さんの前へ立つて、する通りにさせました。するとお婆さんは手早く雪子姫の頸へ笹縁を結んで、ギュッと締付けましたから、雪子姫

は息が止まつて、死んだやうになつて倒れてしまひました。

「さア、これでもうお前は一番美しい人ではなくなつた」

然う言つて老婆は急いで行つてしまひました。

程なく日が暮れて、七人の矮人が歸つて來て、雪子姫が土間へ倒れたまゝ、息もせず動きもしないのを見ると、大變に驚いて、みんなして姫を起こし、笹縁が緊乎と結へてあるのを見て、それを切離しました。すると姫は息を吹き返し、だん〳〵と生氣づいて來ました。矮人達は今日の事を聞くと、斯う言ひました——

「その物賣女は貴女の繼母さんに違ひない、私達の不在には誰も入れないやうに氣をつけなくちやいけない！」

惡い妃は王宮へ歸ると、鏡の前へ行つて言ひました——

「鏡、鏡、壁の上の鏡、

誰が一番美しい？」

すると鏡が前のやうに答へた——

「貴女は本當に美しい、

七人の矮人と雪子姫

「上等の小間物綺麗な小間物レースは色々」